関西大学『社会学部紀要』第33巻第3号，2002，pp.173－228　　ISSN 0287－6817

研究ノート

同時代人のジョン・ロック批判と擁護

妹　尾　剛　光

Criticisms and Vindications of John Locke by Some Contemporaries

Goko SENO

Abstract

The arguments of both Locke critics and vindicators were centred on his religious ideas, additionally dealing with his related ideas on morals and understanding. The core of criticisms was denial of his idea that the only article of faith necessary for salvation was the one that Jesus is the Messiah. Critics pointed out that this was the same idea as Hobbes's, and asserted that the Divinity of Christ, Original Sin through Adam, Christ's Incarnation and Redemption etc., which Locke did not acknowledge, were necessary to understand the meaning of 'Jesus is the Messiah', and therefore were necessary for salvation and that Locke's ideas were closely akin to Socinianism.Bold, a representative vindicator of Locke, held that it made a person a real Christian to be aware that he or she was a sinner, to know that Jesus is the Messiah,and to resign oneself to him, and that such a person would endeavour to know those other things in the Scripture which Christ has taught and would assent to them. He vindicated the very same ideas of Locke as revealing the truth of Christianity. A Socinian vindicator defended Locke's idea that the only necessary article for salvation was the one that Jesus is the Messiah, and asserted in connection with this, that God is one Person, and criticized Edwards and other Trinitarians who opposed it.

Key words : John Locke, Thomas Hobbes, Socinians, John Edwards, John Milner, Samuel Bold, Christianity, salvation, Articles of Faith, Trinity.

抄　録

ロック批判者と擁護者どちらの議論も，焦点はロックの宗教論であり，それに関連してロックの道徳論，認識論が取り上げられている。批判の核心は，「救いに必要な唯一の信仰箇条は，イエスは救い主であるということである」というロックの考えに向けられており，これはホッブズと同じ考えであることを指摘するとともに，ロックが認めていない，キリストは神であること，アダムを通しての原罪，キリストの受肉・贖罪などは，「イエスは救い主である」ことの意味を理解するために必要であり，従って，救いに必要な信仰箇条である，ロックの考えはソッツィーニ派の考えに極めて近い，と主張されている。ロック擁護の代表者ボウルドは，自分を罪人と自覚して，「イエスは救い主である」と知り，自分を救い主キリストに委ねることがその人を本当のキリスト者にする，そのような人は，キリストが聖書の中で教えているそれ以外のことを知ろうと努め，知ったことを受け容れる，と考えて，ロックのこれと同じ考えをキリスト教の真理を明らかにしたものとして擁護した。ソッツィーニ派の擁護者は，救いに必要な信仰箇条は「イエスは救い主である」ということだけであるというロックの考えを弁護し，これと関連させて，神は一つのPersonであると論じて，これに反対するエドワーズら三位一体論者を批判した。

キーワード：ジョン・ロック，トマス・ホッブズ，ソッツィーニ派，ジョン・エドワーズ，ジョン・ミルナ，サミュエル・ボウルド，キリスト教，救い，信仰箇条，三位一体。

Ⅰ．ジョン・ロック批判

1．ジョン・エドワーズ『ソッツィーニ派の信条』1697.

ジョン・エドワーズは、John Edwards, *The Socinian Creed:or, A Brief Account of the Professed Tenents and Doctrines of the Foreign and English Socinians. Wherein is shew'd The Tendency of them to Irreligion and Atheism. With Proper Antidotes against them*（『ソッツィーニ派の信条、外国及びイングランド・ソッツィーニ派が公言した信条と教え略説。それらにある無信仰と無神論への傾向が、適切な解毒剤と共に示される。』), London, J. Robinson, and J. Wyat, 1697.（*E*と略記する）で、先に『無神論の原因・誘因の考察』*E1*（1695）に書いたソッツィーニ派批判を、論点、論者を追加し、論点を更に整理して、提示した。最初にエドワード・スティリングフリートに対する献辞がつけられ、本論では、Socinus, Volkelius, Smalcius, Episcopius（*A Brief History of the Unitarians* 参照), Enjedinus, Crellius, Slichtingius, Vorstius, Servetus, Wolzogen, John Bidle, 最近のイングランドのソッツィーニ派の人々らの考えを、次の通り項目毎に整理して示し、それぞれに対して厳しい批判を加えている。その中でロックに対しては、ソッツィーニ派に好意を持つ人としてその考えを批判した。

Ⅰ．教え

1．聖書について。聖書には、重要でない事柄に関して誤りがある、と言う。自分らの主張を守るために、聖書（特に旧約聖書）の権威を疑い、自分らに都合のよい歪んだ解釈をしている[1)]。

2．神の観念について。ⅰ．神の性質として「独立存在、精神性、偏在、全知」[2)]の否定。「神の永遠」を「時間にあるような持続の連続」と考える[3)]。ⅱ．「三位一体」の否定（子は人間、聖霊は神の力、働きであって、どちらも神ではない）[4)]。「キリストの贖罪」の否定[5)]。「神は、御自分の神聖と正義が傷つけられたことに対する何の代償もなしに、

1）*E*, pp. 3-22.
2）*E*, p. 30.
3）*E*, pp. 44-46.
4）*E*, pp. 30-58.
5）*E*, pp. 59-71.

人間の罪を赦される」[6] という主張。

3．人間の最初（創造された時）の状態について。人間は、神の命令に従うことができる自然の力を与えられているけれども、道徳的に正しいものとして、また、死なないものとして創造されてはいなかった。従って、堕落や死ぬ定めは、アダムの原罪によって子孫に及んだのではない[7]。聖霊は、信仰の後に与えられる（信仰を生み出すのに聖霊は必要ではない）。人間は、聖霊の助けなしに、神の命令に従い、善を行なう自然の力を持っている[8]。

4．人間の未来（死後）の状態について。i．死者の魂は、復活までの間、知覚・感覚を持っていない、あるいは、存在していない[9]。ii．生きている時と同じからだの復活の否定[10]。iii．最後の日に裁きはなく、報いあるいは罰の割当だけがある[11]。iv．最後の日の復活の後、悪人は、永遠に苦しむのではなく、滅びる[12]。

5．キリスト教について。i．「ラクラ派のやり方に好意を持っている人……ロック*Lock*氏……キリスト教の合理性に関する最近の論説の著者」（「彼の友人や賛美者がこれの著者をロックという名で呼んでいる」）の、この論説における主張の要点は、「**新約聖書**のすべての書の中に、われわれが信じ、同意することがどうしても必要なキリスト教信仰箇条はただ一つだけあるということである。この個条は、**イエスは救い主である**、ということに他ならない。私は別のところで、これはソッツィーニ派の教えであることを証明した。」[13] ロックは、生まれつきの観念や原理は人間の心にない（*HU*, I．）と言う、これはSocinusと同じ考えである[14]。ロックを賛美する者は、「理神論〔これは、無神論に至る道[15]〕と聖職者に対する反感」の持主である。などとして、ロックとその支持者に対する批判の言葉を連ねている[16]。ii．キリスト教の教えのすべては、理性に適うものであるべき、という考え。この考えによって、SocinusやSmalciusらは、原罪、三位一体、キリストの贖罪、洗礼などの教えを破壊している。しかし、キリスト教の教えのほとんどは、理性を越えた啓示を基にしている[17]。しかし、別のところでは彼等は、「信仰は理性の及びえないもの

6）E, p. 61.
7）*E*, pp. 74-79.
8）*E*, pp. 79-84. Cf. *E*, pp. 161-162.
9）*E*, pp. 85-94.
10）*E*, pp. 94-101.
11）*E*, pp. 102-106.
12）*E*, pp. 106-119.
13）*E*, pp. 120-121.
14）*E*, p. 122.
15）*E*, pp. 134-135.
16）*E*, pp. 125-130.
17）*E*, pp. 130-135.

である」とも言う[18]。iii.「キリスト教に神秘はない」[19]と考える。――しかし、キリスト教あるいは宗教信仰には、理性あるいは人間の自然の力によっては探ることのできない深い神秘がある。従って、聖書にある神の言葉を信ずるべきである[20]。

Ⅱ. 礼拝

神でないキリストを神に対するのと同様に礼拝すべき、キリストに祈るべき、否、神が命ずる時には、神以外の人や物をも礼拝すべき、と考えている。――これは、異教徒や教皇派の偶像崇拝と同じことである[21]。

旧約聖書では、命じられている神礼拝の中に祈りは含まれていない、と言う[22]。主日は、儀式であり、守る義務はない、と言う。しかし、昔から守られてきたから、守ってよい、と言う[23]。

「〔洗礼と主の晩餐の〕サクラメントの儀式の中には、恵みの授け、信仰の強め、霊の賜物の与えということはない」[24]。「主の晩餐には、キリストの死に対するわれわれの感謝の心を強く働かせる以外の効用はない」[25]。「〔キリストによって〕洗礼は異教徒に対してのみ命じられていた。キリスト教を公に告白する人々の場合には、それは必要ではない。」[26]と考えている。しかし、教会で、特にトルコ人やユダヤ人の改宗者のために、洗礼を使ってよい、とも言う[27]。しかし、幼児洗礼は認めていない。それでも、教会で幼児洗礼を行なってもよい、という人がいる[28]。

Ⅲ. 教会規律・統治

説教、サクラメントを行なう特別の階級の人々の必要を否定する[29]。教会の必要性は説かれてはいるけれども、実際には定まった会合は存在していない[30]。彼等がものを書く時は匿名である[31]。教会はこの世でなくなることがありうる、と考えている[32]。

---

18) *E*, pp. 136-137.
19) *E*, p. 138.
20) *E*, pp. 138-144.
21) *E*, pp. 146-157.
22) *E*, pp. 157-162.
23) *E*, pp. 163-165.
24) *E*, p. 166.
25) *E*, p. 167.
26) *E*, p. 170. Cf. *E*, p. 174.
27) *E*, p. 173.
28) *E*, pp. 173-176.
29) *E*, pp. 177-179.
30) *E*, pp. 179-184.
31) *E*, pp. 184-185.
32) *E*, pp. 185-187.

Ⅳ．実践・道徳

「親切のうそofficious lies」、「色欲」の容認。「慎ましさ、自制、飲食の節度」に適わない行ないの容認[33]。世俗権力（他人に対する支配、死刑を課す権利）は福音の下では法に適わない、とソッツィーニ派のほとんどの人々は考えている[34]。

この後にエドワーズは、ソッツィーニ派と教皇派とは、聖書にある命令を「命令と助言」に区別する、聖書は改竄されていると考えて聖書をけなしている、神以外のものに対する礼拝を認めている、すぐれた行ないや完全さを軽視している、世俗為政者は教会に介入してはならず、宗教の法の違反者を罰してはならない、と考えている、小罪と大罪を区別している、などの点で一致している、と書き、ソッツィーニ派は、自分はそうは思っていないけれども、「ローマの代理人」と言えるのではないか、と言っている[35]。最後にエドワーズは、ソッツィーニ派はキリスト者ではない[36]と断言し、それが無神論へと向かう傾向を持っている[37]ことを指摘している。

本書には後書としてサミュエル・ボウルド『キリスト・イエスについての真の知識短論』と『キリスト教の合理性及びその弁護の数節』に対する「簡単な考察」が付け加えられている（小論209-210頁参照）。

2．匿名『キリスト教の合理性批判』1697.

(anon.) *Animadversions on a late Book entituled the Reasonableness of Christianity as delivered in the Scriptures*（『聖書に述べられているキリスト教の合理性という表題の近著批判』），Oxford, 1697.（*AR*と略記する）は、『キリスト教の合理性』*R*、『キリスト教の合理性の弁護』*VR*（いずれも匿名）におけるロックの宗教論を批判して、次のように述べている。

Ⅰ．書簡の弁護

ロック[38]は、救いに必要な信仰は、福音書と使徒行伝に含まれており、書簡は救いに

33) *E*, pp. 187-193.
34) *E*, pp. 193-201.
35) *E*, pp. 201-206.
36) *E*, p. 226.
37) *E*, pp. 229-231.
38) *AR*では，ロックの名はなく，「キリスト教の合理性の著者」，「われわれの著者」，「この著者」などと呼ばれている。しかし，小論では，ロックと明示する。

必要な基礎の信仰箇条を伝えようとしたものではない〔*R*, pp. 152-155.〕、と言う。しかし、書簡には、救いに絶対に必要な信仰箇条で、福音書や使徒行伝にない教えがある[39]。

「使徒は、書簡で、福音書、使徒行伝にあること以外のことを、救いに絶対に必要な信仰箇条として指示してはいない」と言われるかもしれない[40]。

1.「救いのために信ずることが絶対に必要であると〔キリストによって明確に〕言われていること以外のことは、救いのために信ずることが絶対に必要ではないのか。」もしも例えば「イエスは救い主である」ということだけが、それの説明なしに、救いに必要な唯一の信仰箇条であるとするならば、それの意味は明瞭でないから、限りない論争と混乱を引き起すことになる。従って、それの根拠・理由、本性・広がりを明らかにするものが同じように必要である、即ち、聖書に、救いに絶対に必要であると明確に言われていること以外にも、救いに絶対に必要なことはある[41]。

2. 福音書にも書簡にも、神は嘘を言わないという、信仰の一般的根拠に基づいて信ずべきことが多くある。それに加えて、そこには、「人間の永遠の利益と幸福」即ち「救い」にとって、明確に信ずることが絶対に必要なことがある[42]。

① 書簡は神の啓示である。そのことを証明する、福音書の場合と同じ奇蹟がある[43]。書簡が神の啓示であるならば、そこには救いに必要なことが書かれているはずである。われわれは、救いに必要な基礎の信仰箇条の、過不足のない完全なリストを作ることはできないけれども、すべてのキリスト者が信ずるよう命じられている（福音書や使徒行伝にはない、あるいは、明確に表現されていない）信仰箇条の幾つかを書簡から示すことはできる（後述、小論180頁参照）[44]。

ロックは、書簡に書かれてあることは真理であるけれども、救いに必要な信仰箇条ではない〔*VR*, p. 176.〕、と言う。――しかし、キリストは使徒に、自分と同じ権威、即ち、救いに必要なことを教える力を与えられた（マタイ伝28：19. ヨハネ伝20：21.）。また、パウロは、彼の教えを神からの直接の啓示によって得たし（ガラテヤ書1：11. 12. コリント前書14：37.）、彼は、異邦人に福音を述べ伝えた最初の人と言ってよく、彼の教えは異邦人にとって、福音書が書かれるまでは、信仰の唯一の原則であった[45]。

② 書簡が書かれた目的・理由。神は、福音の誓約における、人間が幸福を得るに必要な

39) *AR*, pp. 3-4.
40) *AR*, p. 7.
41) *AR*, pp. 8-10.
42) *AR*, p. 11.
43) *AR*, pp. 12-14.
44) *AR*, pp. 15-16.
45) *AR*, pp. 18-22.

条件を、ⅰ．キリストによる贖罪とそれを確証する奇蹟の啓示、ⅱ．聖霊による、救いに必要なすべてのことのより十分、明確な啓示（ⅱの仕事は、使徒に委ねられた）によって示された。リンボルクは、「救いに必要な信仰、実践の教えのすべては四福音書に、否、マタイ福音書だけに含まれている」（*De Veritate Religionis Christianae*）と言っているけれども、福音書ではそれほど明確ではなかったことが、書簡では明確にされている。特に、「救い主の死と復活の理由」即ち贖罪について[46]。

福音書は、絶対に必要な信仰箇条のすべてを十分に、また明確に含んではいない。ⅰ．聖霊が来る前には、使徒は、イエスが救い主であるのは彼が現世の栄光ある国を打ち建てることだと誤解していた〔使徒行伝１：６.〕。また、救い主は弟子たちに、「私には多くの言うべきことがあるが、あなたがたは今それを聞くことはできない」〔ヨハネ伝16：12.〕と言い、あるいは、聖霊を遣わして、自分について信ずべきことを更に教えると約束された（ヨハネ伝14：26.）ことは、自分が十分に言っていなかったことで、信ずる必要のあることがまだあるということを示している。ⅱ．福音書には、救い主についての歴史や行為に関わるすぐれた教えが主として書かれており、信仰の事柄については、救い主が言われたこと以上のことは書かれていない。ⅲ．そこでは、救い主は、自分については象徴的（神秘的）に mystically 述べており、自分の行為から人々が結論を引き出すのに委ねている。

たとえ救いに必要な信仰箇条のすべてが福音書にあるとしても、書簡におけるそれのより十分な、明確な説明は、信ずる必要のあることである[47]。

使徒行伝も、主として歴史的叙述である[48]。

使徒信条は救いに必要な信仰箇条のすべてを尽しているけれども、そこにあることは福音書と使徒行伝にある〔*VR*, pp. 166-169.〕、と言われる。――たとえそうであるとしても、そこから当然に導き出されること、そこに含まれていること（これは、福音書、使徒行伝以外のところに書かれている）もまた必要な信仰である[49]。

ロックは、書簡が書かれる前に死んだ人はどうなるのか、たいていの書簡は、救い主の昇天後20年以上後に、あるものは30年後に書かれた〔*R*, p. 155.〕、と言う。――ⅰ．書簡のあるものは、福音書のあるもの、特にヨハネ福音書より前に書かれた。従って、ロックの考えに従えば、ヨハネ福音書は基礎の信仰箇条を含んでいないことになる。ⅱ．多くの書簡が使徒行伝より前に書かれている。ⅲ．福音書が書かれる前に、多くのキリスト者が

46）*AR*, pp. 22-24.
47）*AR*, pp. 26-29. Cf. *AR*, pp. 73-77.
48）*AR*, pp. 29-30.
49）*AR*, pp. 30-31.

死んでいる。従って、福音書についても、書簡について上に言われていることと同じことが言える。iv．救い主昇天後の何年間かは、使徒がキリスト者に必要な信仰の原則を教えていた。従って、それを書いていると考えられる書簡は、絶対に必要な信仰の教えを含んでいる[50]。

ロックは、「書簡は、既にキリスト者である者に対して書かれた」〔*R*, p. 152.〕と言う。——そうであるとしても、それはその人々に基礎の信仰箇条を思い出させ、その意味を明確にして論争が起らないようにするためのものでありうる。書簡が書かれた相手の人々は皆、基礎の信仰箇条のすべてをよく理解していた、とどうして言えるのか。むしろそうでない人々がいた、と考えられる。福音書や使徒行伝についても、書簡についてと同じことが言える。それらもまたキリスト者に対して書かれたけれども、そこには基礎の信仰箇条はあまり書かれていないとは言えない[51]。

従って、福音書からも書簡からも、救いに必要な基礎の信仰箇条を知ることができる。もしも福音書と使徒行伝に必要な信仰のすべてが明確に書かれているのであれば、使徒は書簡で不必要なことを書いたことになる。使徒は書簡で、救いに必要な信仰箇条として、「キリストがわたしたちの罪のために死なれたこと」〔コリント前書15：3.〕、「復活したこと」〔コリント前書15：4.〕、そのことによってわたしたちも復活すること〔コリント前書15：20.〕、「アダムにおいてすべての人が死ぬことになったように、キリストにおいてすべての人が生かされることになる」〔コリント前書15：22. ロマ書10：9.参照〕(これは、福音書にも使徒行伝にもない)、「キリストは肉において現れ」〔テモテ前書3：16. ヨハネ第一書4：2.〕、「イエスは神の子〔神であること〕」〔ヨハネ第一書4：15. Cf. *AR*, p. 40.〕などを挙げている[52]。

ロックは、書簡は個別の〔特定の教会の〕必要に応じて書かれたから、救いに必要とは考えられない〔*R*, pp. 153-154.〕と言う。——書簡は特定の教会宛であっても、それは、その特定の教会の必要に応じてのみ書かれたのではない。より広い範囲の人々のために書かれたのであり、むしろ多くの書簡は、すべてのキリスト者のために書かれている。また同じことは、福音書についても言える。そこにあるキリストの言葉は、個別の必要に応じて言われたことであるけれども、すべてのキリスト者に関わるものである[53]。

贖罪の理由・根拠については、聖書の中で書簡において最も十分、明確に説明されてい

50) *AR*, pp. 31-32.
51) *AR*, pp. 32-34. p. 37.
52) *AR*, pp. 34-36.
53) *AR*, pp. 38-44.

る。これを知ることが救いに必要であるならば、書簡の中のその個所を信ずることは必要である[54]。

③　福音書と書簡との間に矛盾はない。共に、人間の幸福を推し進めるための神の啓示である[55]。

④　書簡は、救いに不可欠な信仰の教えを述べている（上述）。

ロックは、「書簡では、基礎の信仰箇条は、それ以外の真理と区別されずに、混ざり合っている」〔*R*, p. 154. *VR*, p. 167.〕と言う。――しかし、この点では福音書も使徒行伝も同じことである。どちらにおいても、基礎の信仰箇条とそれ以外の真理とを区別できる[56]。

書簡の中の事柄については、解釈がさまざまである〔*R*, p. 156.〕、と言われる。――ⅰ．福音書についても同じことが言える。ⅱ．しかし、それらの双方にある基礎の信仰箇条については、普遍 Catholick 教会全体はこれまでずっと同じ意味で理解してきた。それの意味は、それほどに明確である。ⅲ．普遍教会the Universal Churchは、あらゆる時代に、書簡の中に救いに必要な信仰箇条があるということに同意し、書簡は福音書と共に疑う余地のない権威を持つと考えてきた（イングランド教会39箇条の第６条）。教会はこれまでずっと、聖書の中のある部分の権威を認めない者を異端と見なしてきた[57]。

ロックは、書簡が書かれる以前に死んだキリスト者はどうなるのか〔*R*, p. 155.〕と言う。――自分にできる限りでキリスト教の信仰を持ち、実践を行なった者は、その後の人々と同じように救われる。それは、福音書を知らない人の場合も、書簡を知らない人の場合も同じことである[58]。

Ⅱ．キリストがこの世に来られた理由について

創世記２,３章には、アダムによってわれわれが失ったものは「至福と不死」〔*R*, p.5.〕であることが書かれているけれども、アダムが神の命令に反したことの罰については、明確に書かれてはいない。ロックは、「ちりから作られたが故にちりに帰る」〔創世記３：19.〕と書かれているから、からだも魂も死ぬべき定めとなったと考えている。しかし、この創世記の言葉から「魂の死」は導き出されない。魂は、ちりから作られたのではなく、神の息によって作られたのである〔創世記２：７.〕から、ここで言われている死は、「完全に

54）*AR*, p. 45. pp. 51-52.
55）*AR*, pp. 45-46.
56）*AR*, pp. 46-47. Cf. *AR*, p. 6.
57）*AR*, pp. 47-49.
58）*AR*, p. 50.

存在しなくなること、生命と感覚のあらゆる行ないを失うこと」〔*R*, p. 7.〕ではない。なお、アダムの子孫に対する罰は、創世記2,3章には書かれていない。これは、新約聖書、特に書簡によらなければ、明確にはわからない[59]。

アダムが受けた「死」とは、「存在の状態において、神の好意〔幸福〕を永遠に失うこと」である。聖書では、「死なない」とは「幸せの永遠の享受」のことである（ヨハネ伝5：24. 11：26.）。従って、アダムとその子孫が受ける当然の罰は、「永遠の悲惨」であって、単に一時の死ではない[60]。

キリストがこの世に来られたのは、「われわれの代りに苦しみを受けることによって、この世のすべての人々の罪をあがない、人間を〔来世における永遠の悲惨から救い出して〕神の好意に再び与らせるため」であって、単に至福と不死を得させるため〔*R*, p. 9.〕だけではない[61]。

「キリストは、われわれが受けるべきであったのと同じ罰を受けたということではなくて、彼の位格Personの高貴さの故に、彼の苦しみはこの世のすべての罪人の永遠の罰と同等のものとなったということである。また、キリストの贖罪というこの観念は、最近のソッツィーニ派の著作者たちが主張しているように、神は無償で罪人を赦すという信仰を無にするものでもない。なぜならば、キリストが無償で自らを捧げて、われわれのために苦しまれたように、神は、われわれの功績なしに無償で、キリストの義務では全くなかったその贖罪を受け容れられたからである。」「こうして神の正義は、罪を犯した人々においてではなくて、神の永遠の子において、罪の罰によって満たされた。神の子は、罪を犯した人々のために御自分の血で償いを支払われたのである。」これが聖書に言われているキリストの死の本当の意味である[62]。

Ⅲ. キリストについて何を信ずるべきか

ロックは、「イエスは神の子、救い主である」と信ずることが救いに必要な唯一の信仰である〔*R*, pp. 17-111.〕、と言う。――これは、ホッブズHobbsと同じ考えである。福音書と使徒行伝を基にするという、その証明の仕方も同じである（*De Cive*, XⅦ, 5-10.）[63]。

ロックのこの考えは間違いであるけれども、彼の意図は誠実である。しかしホッブズは、

59) *AR*, pp. 53-56.
60) *AR*, pp. 56-57.
61) *AR*, pp. 57-58. p. 60.
62) *AR*, p. 60. Cf. *AR*, pp. 61-62.
63) *AR*, pp. 64-65.

ロックよりはるかに悪い意図を持って書いている[64]。

「神の子」と「救い主」、「キリスト」とは、聖書では常に同じ意味ではない。聖書の多くの個所で「神の子」は「救い主が神であることを示す表現」である。これは、「救い主」や「聖霊により処女から生まれたもの」を越えるものである。例えば、ヘブライ書１：2. 8．は、神の子はこの世の創造以前に居られたこと、永遠の昔から神であったこと、を示している。また、救い主が弟子に言われた「父と子と聖霊の名によって洗礼を授けなさい」〔マタイ伝28：19.〕も、子は本性からして神であることを示している。ヨハネ伝20：31.「イエスはキリスト、神の子であると人々が信ずるように」も同じ意味。ヨハネ福音書は、キリストが神であるということに反対する人々への反論として書かれたのである。ヨハネ伝10：33. 36. マタイ伝26：63. は、当時のユダヤ人が「神の子」を「神」と考えていたことを示している。従って、「イエスは救い主である」ということ以上のことを信ずる必要があることは明らかである[65]。

「イエスは救い主である」あるいはそれについてのロックの説明〔*R*, p. 157. *VR*, pp. 174-175.〕は、救い主について信ずる必要がある十分な、過不足のないことであると、聖書のどこに明言されているのか、わからない[66]。

１．キリストがこの世に居られた時にキリストの信者となった人々、キリストの弟子などは、使徒でさえ、キリストについての正しい、明確な知識を持っていなかった、即ち、キリストがこの世に来られた本当の目的を明確に十分に知っていなかった。従って、キリストがこの世に居られた時に人間をキリスト者にするのに十分であったことは、キリスト昇天後もそうである、とは言えない。つまり、福音書にイエスについて書かれていることが信仰の適切な原則である、とは言えない。また、キリストがこの世に来られるより前には、ユダヤ人はモーセの法を守ったが故に、キリストのとりなしによって救われた、と言える。しかし、十分な、明確な啓示があった後の今では、その啓示に基づく信仰と実践が救いに必要である。「多く与えられた者は、多くを求められる」〔ルカ伝12：48.〕。即ち、「救い主」の意味、イエスはどのようにして救い主になられたか、イエスは神か、などについて信ずる必要がある[67]。

２．福音書と使徒行伝〔あるいは聖書〕は、救い主についてロックが言っていること以上のことを信ずることを要求している。

64）*AR*, The Preface.
65）*AR*, pp. 66-72.
66）*AR*, pp. 72-73.
67）*AR*, pp. 73-77.Cf. *AR*, pp. 26-28.

① 「イエスは神であること」(ヨハネ伝1章. マタイ伝28：29. コロサイ書2：8-9. 使徒行伝7：59. 60.)。当時のユダヤ人は、救い主は神である、と考えていた。弟子たちは、イエスは神である、と信じていた。聖書は繰り返し、救い主は神であると、特にそれに反対する人々に対する反論として言っている。そのことが信じても信じなくてもどちらでもよいことであるならば、なぜそのように熱心に言われているのか。その上、普遍教会 the Universal Church は始めから、キリストは神であるということを、聖書に疑いえない言葉で表現されていることとして主張し、それに反対する者を異端として非難してきた[68]。

② 「キリストの受肉」、「キリストは神と人間の本性を共に持っていたこと」(ヨハネ第一書4：2-3. ヘブライ書2：17. テモテ前書3：16. フィリピ書2：6-8.)[69]。

③ 「キリストはわたしたちのために、わたしたちに代って、来るべき怒りからわたしたちを救ってくださるために死なれた」〔テサロニケ前書1：10.〕、「キリストの死は、わたしたちの罪を償ういけにえであった」〔ロマ書3：25. ヨハネ第一書2：2. 4：10.〕、「キリストの血は、罪が赦されるように、多くの人々のために流された、新しい契約の血であった」(マタイ伝26：28.)。

キリストについてのこれらの知識は、「神は正しい、善である、慈悲深い、摂理により万物を支配しておられる」などの神についての知識と同じく、救いの条件である[70]。

完全なキリスト者にとっては信ずるべきことは他にもあるけれども、人間をキリスト者にするために、救い主や使徒が要求した信仰は、「イエスは救い主である」ということだけである〔*R*, p. 156.〕、と言われるかもしれない。――i. 上に述べた知識がなければ、新しい誓約の本性も、イエスは救い主であるということの意味も全く理解できない。従って、それらは、人間をキリスト者にするのに必要な信仰である。ii. キリスト者は、イエスは神の子であると認めること(上述、小論183頁)、更には三位一体を信ずること(マタイ伝28：19. 使徒行伝19：2-3.)が必要である[71]。

ロックは、彼の言う「唯一の信仰箇条」は、「庶民の能力、無学の人の理解力に適う」〔*R*, p. 157.〕、と言う。――i. 人間の理性で理解できないということが、神の啓示であることが明らかであることを拒否する十分な理由であるか。それでは、そのことを絶対に必要な信仰とした啓示は正しくないことになる。啓示に直接の矛盾がない限り、それを神の証言であるが故に信ずることは、たやすいことである。ii. 神は無学の者にも学問のある

68) *AR*, pp. 78-89.
69) *AR*, p. 90.
70) *AR*, pp. 90-92.
71) *AR*, pp. 92-94.

者にも啓示されたのであり、両者を区別していない。聖書は無学の者にも理解できる。理解できない神秘は、誰にも同じように理解できない。そのような神秘については、神は嘘をつかれないということを基に信ずる以外にない[72]。

3．「三位一体」、「この世の創造」、「神と人との位格の統合」などの神秘については、聖書の啓示を信ずるべきである。しかし、このそれぞれがどのような仕方で成り立っているかの説明は、聖書には書かれておらず、また、われわれの理解の及びえないことであるから、信ずる必要はない。これらについてどこまで信ずるべきかは、従って、理性が決めることができる[73]。

「聖書に明確に記されていること、あるいは、それから当然に導き出されること以上のことを信ずる必要はない」、しかし、聖書に明確に述べられている信仰の事柄は、信仰箇条として否定するべきではない[74]。

4．ロックの言う信仰の原則は、庶民にわかりやすいものであるか。「イエスは救い主である」という命題は、容易に理解できるものではない。救い主とは何か、何から、どのようにして救うのか、などと問われるであろうけれども、ロックが説明すればますますわかりにくくなり、また、聖書との不一致が明らかになる[75]。

こうして『キリスト教の合理性批判』*AR*は、ロック『キリスト教の合理性』の中の誤りを三点に整理して示し、それに反論している。まず、書簡は、福音書、使徒行伝と同じ神の啓示であること、従って、書簡には救いに必要な基礎の信仰箇条が基礎でないものと区別できる形で書かれているということを指摘し、それを基にして、救いに必要な信仰は、ロックの言う「イエスは救い主である」ということだけではなくて、書簡に書かれているキリストの贖罪、またその前提である「イエスは神であること」（「神の子」は、神であるという意味である）、更には、「三位一体」、「キリストの受肉」もまた救いに絶対に必要な信仰であること、これらの事柄を信じ、知ることは、「イエスは救い主である」ということの意味を理解するために必要であることを主張している。これは、既にエドワーズが『無神論の原因・誘因についての考察』*E1*で指摘していたのと同じことである。但し、『キリスト教の合理性批判』の著者は、ロックの誠実を認めており[76]、また、『キリスト教の

72）*AR*, pp. 95-97.
73）*AR*, pp. 97-98.
74）*AR*, p. 102.
75）*AR*, pp. 98-101.
76）*AR*, The Preface.

合理性』は「啓示の必要性、悔い改め、善き業の条件」については思慮深く書かれている[77]、とこの『批判』では書いている。ロックの誠実を認めていないエドワーズ[78]と比較すれば、その論調はより穏やかである。また、『無神論の原因・誘因についての考察』でのはるかに短いロック批判よりは、議論はより綿密である。

これらの批判点について、ロックは『パウロ書簡 義訳と注』では、書簡には救いに必要な信仰箇条が基礎でないものと区別できる形で書かれていることを、更には、救いに必要な信仰箇条は「イエスは救い主である」ということだけではなくて、死者の復活もまたその一つであることを、明確に認めるようになった。しかし、イエスは神であること、三位一体、キリストの受肉、キリストの贖罪という、『批判』が指摘したキリスト教の伝統的な教えをロックは『パウロ書簡 義訳と注』でも認めてはいない。

3．ジョン・ミルナ（匿名）『ロック宗教論の説明』1700.

次に、ジョン・ミルナJohn Milner（1628-1702）（匿名）の著書（anon.），*An Account of Mr. Lock's Religion, Out of his Own Writings, and in his Own Words. Together with some Observations upon it, and a Twofold Appendix. I. A Specimen of Mr. Lock's Way of Answering Authors, out of his Essay, l. 1. c. 3. where he takes upon him to Examine some of the Lord Herbert's Principles. II. A brief Enquiry whether Socinianism be justly Charged upon Mr. Lock*（『ロック氏宗教論の、ロック自身の著作からの、ロック自身の言葉での説明。それに関する考察と二つの付論、I．著作者に対するロック氏の答え方の典型例を、ハーバト卿の幾つかの原理を検討している、知性論第1巻第3章に見る、II．ロック氏をソッツィーニ主義と非難するのは正当かどうかを簡単に尋ねる、を付す。』），London, J. Nutt, 1700. の内容を紹介して、簡単に考察する。

ミルナは、1642年Christ's College, Cambridgeに入学し、後聖職者となった。WilliamとMaryに対する臣従宣誓を拒否して、聖職禄のすべてを剝奪され、St. John's College, Cambridgeに退いた。ロック宗教論を批判して、ロックをソッツィーニ主義と非難した本書の他に、*Animadversiones upon M. Le Clerc's Reflexions upon our Saviour and His Apostles*, Cambridge, 1702. などを書いた。

77) *AR*, p. 102.
78) *E1*, pp. 109-113.

本書は、宗教、特にキリスト教に関わる31の項目を章として立てて、各章毎にロックの『人間知性論』*HU*,『キリスト教の合理性』*R*, エドワーズに対する反論*VR*, *2VR*, スティリングフリートに対する反論*LBW*, *RBW*, *RBW2*, 更には『教育に関する考察』*Ed* の中から関連個所を引用するとともに、ミルナ自身の考察を付け加えたものである。

ミルナがこの考察の中でロックを批判した点の要旨は、次の通りである。

1．ロックは、人間は神の観念を生まれつき持ってはいない〔*HU*, Ⅳ, Ⅹ, 1.〕と言う。その理由として、1．神の観念を持っていない国民がいる〔*HU*, Ⅰ, Ⅳ, 8.〕と言う。しかし、ロックがそこで挙げている航海記の証言は、国民全体が礼拝する神あるいは偶像がないところがある、などと言っているのであって、これらの人々が神の観念を何も持ってはいない、とは言っておらず、むしろ宗教心の痕跡はある、と言っている。

2．われわれの中に無神論者がいる〔*HU*, Ⅰ, Ⅳ, 8.〕とも言う。しかし、「無神論者の議論は、〔口先だけのものではなくて〕彼等の心の言葉である」とは言えない。病や死の接近が神の観念を呼び覚ますということがありうるからである。

またロックは、「神の観念は神の存在を証明しない」と明確に言っている〔*LBW*, p. 55.〕。そうであれば、「神の存在についての人類の普遍的同意」を無価値なものにしていない〔*LBW*, p. 53.〕というロックの言い分は成り立たない。

こうしてロックは、「神の存在についての人類の普遍的同意」や「神の観念」から神の存在を証明しようとする議論を弱めている――神を信じていないわけではないが。

3．「観念」という言葉を使わない方が、『人間知性論』はよりわかりやすかったであろう。ロック自身が、*HU*, Ⅳ, Ⅹ．では、わかりやすくするために普通の言葉、言い方を使い、観念という語を一ヶ所でしか使わなかった、と言っている〔*LBW*, p. 58.〕。

5．ロックは『キリスト教の合理性』で、イエス・キリストは不死であるという点で神の似姿であった〔*R*, p. 106. p. 108.〕と言う。――イエス・キリストは人間としては不死ではなかった、甦った後不死となった。

6．キリストについて、「神の子は肉を着ている間は、罪を除いて人間本性のあらゆる弱さ、不都合を免れていなかった」〔*HU*, Ⅲ, Ⅸ, 23.〕と言う。――もしも復活の後は肉を着ていなかった、という意味であれば、ルカ伝24：39.「わたしの手や足を見なさい」と矛盾する。

「キリストがこの世に来られた主な目的は、王であることであった」〔*R*, p. 112. p. 113.〕――聖書では、「王であること」がその一つの目的であるとさえ明確に言われてはいない。ロック自身も*R*, pp. 125-126. では、「罪の赦しとキリストによる救いが、キリストが来ら

れたことの大きな目的であった」と書いている。

7．ロックは『キリスト教の合理性』でキリストによってわれわれに与えられた利益を論じているところ〔*R*, pp. 137-151.〕で、「キリストの血に対する信仰を通して罪を償う供え物」（ロマ書3：25.）、「わたしたちの罪、いや、全世界の罪を償う供え物」（ヨハネ第一書2：2.）、「わたしたちは御子の血によって贖われ、罪を赦されました」（エフェソ書1：7．コロサイ書1：14.）に何も触れておらず、『キリスト教の合理性』の他の個所でも、この「キリストの血による贖い」については何も書いていない。

8．ロックは『第二弁護』で、『キリスト教の合理性』には贖罪satisfactionのことがはっきりと書かれており、「〔そこで自分が引用した〕書簡の言葉は、贖罪を意味していると考えられている」〔*2VR*, p. 267.〕と書いている。しかし、自分がそう考えている、とは書いていない。またロックは、『キリスト教の合理性』ではすべてのキリスト者が同意する利益だけを書いた〔*VR*, p. 164. Cf. *2VR*, p. 375.〕と言っているけれども、彼の挙げている利益にすべてのキリスト者は同意するか。

9．ロックは、キリストによって与えられた利益の中に、すぐれた道徳の教えを示されたことを挙げている〔*R*, pp. 138-147.〕が、旧約聖書にも、自分がしてほしいように他の人にもせよ（マタイ伝7：12. 参照）、や、敵を愛せよ（出エジプト記23：4-5．箴言25：21-22.）、などのすぐれた道徳の教えがある。

11．ロックは、*R*, p. 21. p. 22. では、「神の子」と「救い主」とは同じ意味の言葉であったと言い、しかし、*R*, p. 76. では、この二つを別のものと言っている。これは、矛盾である。またロックは、*R*, p. 113. では、「救い主 the Messiah」とは、「祭司、預言者、王という三つの大きな役割の担い手として油を塗られたもの」であると書き、*R*, p. 106. では、「神の子」とは「神の直接の力によって、（男を知ることのなかった）処女の胎に宿ったもの」と書いている。この二つは違うものである。

12．三位一体について。ロックは、自分はユニテリアンと間違って結びつけられている、と*RBW*, p. 104. p. 110. p. 112. などで不満を述べているけれども、1．彼は『キリスト教の合理性』で、「父と子と聖霊の名によって」と書かれているマタイ伝28：19. に全く触れていない。2．新約聖書では神の子は神を意味していない〔*2VR*, pp. 370-373.〕と言う（新約聖書は、神の子は神を意味しているとユダヤ人がその時考えていたことを示している。ルカ伝22：70-71. ヨハネ伝10：33-36. マタイ伝26：65. マルコ伝14：63-64. 参照）。3．i．「キリスト教会で受け容れられてきた三位一体の教えを認めると公言すればよい」〔*A2L*, p. 4.〕と言われながら、*RBW2*では、そう言うことを拒んでいる、また、*E2*（6, p.

82.）で、ロックは三位一体否定論である、と明確に言われながら、そうではないということを、それに対する回答でも、それ以外のところでも、明言していない。ii.「キリスト教会でこれまでずっと受け容れられてきた三位一体の教えを私は知らない」〔*RBW2*, p. 197.〕と言っている。「これまでずっとalways」はロックの挿入であり、イングランド教会で受け容れられてきて、今も受け容れられている三位一体の教えを認めれば十分なのである、しかし、ロックはそれを認めようとはしない。4．NatureとPersonについて、その意味を明らかにしようとしてきた言説をばかにしている（*LBW*, *RBW*, *RBW2*）。5．*RBW2*, p. 343. で、私はここで「一つのNatureの中に三つのPersonsがある、あるいは、二つのNaturesと一つのPersonがある」ということが真理であることに疑いを立てないし、そのことを否定はしない、と書いている。ここでという語は、ここ以外の所では疑い、否定するかもしれない、という意味を含んでいる。

13.『書簡』について。その中の真理のすべてがあるいは大抵のものが救いにいたる基礎の信仰箇条である、と考えている人は誰もいない。「『書簡』のほとんどは、救い主の昇天後二十年以上後に、あるものは三十年以上後に書かれた」〔*R*, p. 155.〕ということは、ロックの推測にすぎず、確実なことではない。『書簡』だけでなく、聖書の他の所においても、そのすべてあるいは大抵のものが基礎の信仰箇条ではないし、基礎の信仰箇条とそれ以外の真理とは区別されずに混ざり合っている。逆に、『書簡』の中でも、基礎の信仰箇条がそれ以外の真理とは区別された形で書かれているところがある（例えば、ロマ書10：9．テモテ前書1：15．ヘブライ書11：6.）。

14. ロックは、救いに必要な信仰箇条としてイエスや使徒が説教で示したのは、「イエスは救い主であること」だけである、と繰り返し言う一方で、それ以外にもイエスや使徒が説教した箇条があることを認めている。例えば、「イエスの生、死、復活、昇天」〔*R*, p. 98.〕、「救い主は処刑され、三日目に死者の中から甦り、旧約に救い主について書かれていたすべてのことを成就された、このことを信じて悔い改める者は、救い主に対するこの信仰により、罪の赦しを受ける」〔*R*, p. 99.〕、「ナザレのイエスは救い主であるという信仰は、イエスの復活、支配、イエスはこの世を裁くために再び来られるという、それに伴う箇条とあわせて、〔義とされるに〕必要であった」〔*R*, p. 151.〕。

このことは矛盾である。1．ロックは、「イエスは救い主」と「イエスの復活」とは同じ一つの箇条である〔*2VR*, p. 342.〕と言う。しかし、この二つは別々の箇条であり、ロック自身もそこで「二つの箇条」と言っている。2．ロックは、「イエスのはりつけ、死、復活」は、「イエスは救い主」という基礎の箇条を人々に説得するために使われていたも

のであって、基礎の信仰箇条ではない〔*2VR*, p. 322.〕と言う。しかし、ロックは、*R*, p. 20. では、「イエスの復活は、普通はキリスト者に必要な信仰箇条として信じられることが要求された」と言っている。またロックは、「イエスのはりつけ、死、復活」は、「イエスは救い主である」ことを証明するために使われていた〔*2VR*, p. 322.〕とも言う。そうであれば、前提である前者を信ずることは結論を信ずるために必要である、と言える。

上述の、「イエスは救い主である」以外の箇条は、聖書では、場合によってはそれだけが、使徒によって、キリスト者になるために信ずる必要のある箇条として示されている。また、「イエスは救い主である」と救い主自身が明確に言われたのは、彼の死が近づいた時であり、使徒がそれを明確に言い始めたのは、救い主の復活の後である〔*R*, p. 34.〕とロックは言う。そうであれば、これが救い主の説いた唯一の福音箇条であると言うのは、おかしい。また、マタイ伝28：19-20. によれば、キリストが使徒に対し、洗礼を人々に授ける前に教えるように指示したことは、三位一体に関する教えであったことは明らかである。

15. アダムの堕落について。ロックは、アダムが禁断の木の実を食べたためにこうむったのは、「からだの死〔を受ける身となったこと〕」と考えている〔*R*, pp. 5-6.〕。このことは、ほとんど誰も否定しないだろう。しかし、死とは、聖書では、それだけではなくて、悩み、苦しみのことでもある。ロックは、アダムのこうむった死とは、「罪の状態、即ち、地獄の火の中での永遠の苦しみ〔の状態〕」、「あらゆる行為において必然的に罪を犯し、神の怒りを引き起こさざるをえない状態」であるという考えを否定して〔*R*, p. 6.〕、死とは「存在しなくなること」であると言う〔*R*, p. 7. Cf. *R*, p. 11.〕。しかし、この理解はおかしい。またロックは、罰せられるのはそれぞれの人間の行ないによると言う〔*R*, p. 8.〕。しかし、他人の罪のために苦しむ例は、聖書に幾つかある。

16. ロックは、自然法は「われわれの自然の力により、自然の原理から知るようになれる」〔*HU*, 1-3版, Ⅰ, Ⅲ, 13. 4版では、「われわれの自然の力を使い、適切に用いることによって〔自然法を〕知るようになれる」と改訂した〕と言う。ロックは、「生まれつきの原理」を否定しているから、この「自然の原理」とは何かがわからない。

自然の力、理性の光を使わない人もいるし、啓示を受けていなくても自然法を知り、それに同意している人々もいる。

17. 自然宗教について、ロックは、神の業と摂理は明確であり、神は人間に理性の光を与えておられるから、探究しようとする者は、一神の存在を疑うことはありえない〔*HU*, Ⅲ, Ⅸ, 23.〕と言う。——これは、*HU*, Ⅰ, Ⅳ, 8. と矛盾する。古代の無神論者はこの点

について探究しようとしなかった、とは言えないし、自然宗教が論駁されたことはほとんどない、とは言えない。このことは、自然宗教の原理、教えがロックの言うほど明白でわかりやすいものではないことを示している。

啓示宗教は、言葉で伝えられているために、曖昧、不確実である〔*HU*, Ⅲ, Ⅸ, 23.〕とは言えない。啓示の言葉には明確なものがある（例えば、神を愛せよ、汝の隣人を愛せよ、断食して祈れ、人にせられんと思うように人にせよ）。言葉には曖昧さがつきまとうとすれば、ロック自身も言葉で書いているから、不明確だということになる。「私は感謝して啓示の光を受け容れ、喜ぶ」〔*RBW2*, p. 492.〕と言う時、啓示は曖昧、不確実ではない、とロックは考えていたはずである。

新しい啓示はもうないし、聖書の中に啓示されたことは理性に反していないから、理性による啓示の判断について云々する必要はない。ロックは、明確な直観的知識に反する命題は神の啓示とは言えない〔*HU*, Ⅳ, XⅧ, 5.〕、理性の明確、自明の指図に反することは、信仰の事柄として同意を要求する権利をもたない〔*HU*, Ⅳ, XⅧ, 10.〕、と言う。しかし、特定の命題が自明かどうかは、人によって意見が分かれる。

啓示についての判断においては理性に聞くべき〔*HU*, Ⅳ, XⅧ, 6.〕とロックは言う。しかし、アブラハムに神の啓示を受け容れさせたのは、理性ではなくて、信仰であった（それは、全く理性に反する命令であった）。ノアの時の洪水、イエスの復活を人間が受け容れるのも同じことである。

HU, Ⅳ, XⅥ, 14.〔1-4版〕では、「啓示に対する信仰は、われわれの知識と同じ確実さを持つ」〔5版では、「知識それ自体と同じく絶対的にわれわれの心を決め、知識と同じく完全にあらゆる動揺を取り除く」と書き改められた〕と書かれている。しかし、それ以外のところでは、「信仰の確実さ」は否定されている。

18. 神秘について。ロックは、自分がユニテリアンと結びつけられて、三位一体や神秘を否定していると考えられがちであることに不満を述べて〔*RBW*, p. 104. p. 110.〕、「聖書の中には私にとって神秘がある」〔*LBW*, p. 96.〕と言う。しかし、これが「聖書には、自分が決して理解することのできない神秘がある」という意味であれば、*Christianity not Mysterious*の著者と同じ考えと言えるであろう。

19. 義認について。「神は人間を信仰の故にfor believing義とする」〔*R*, p. 15.〕という言葉は、聖書にはない。聖書では「信仰によってby Faith」と言われている。〔21章、23章参照〕

「法に厳密に従う者には、永遠の生命に対する権利の資格があると思われる」〔*R*, p. 9.〕

とロックは言う。「権利」が「神の約束による権利」の意味であれば同意できるが、「神の約束がなくても当然の権利」の意味であればおかしい。ルカ伝17：10. にも「自分に命じられたことをみな果たしたら、わたしどもは取るに足りない僕です、しなければならないことをしただけです、と言いなさい。」と言われている。

20. ロックは、あるところでは「信仰は知識と同じく確実である」〔*HU*, Ⅳ, Ⅻ, 14. 17章参照〕と言い、別のところでは「信仰の確実性」に反対している〔*RBW*, pp. 146-147. *RBW2*, pp. 274-275.〕。これは矛盾である。

ロックがこの点で「信仰、確信、ありそうであること」と「知識、確実性」の区別という自説を支持する者として挙げているChillingworthとHooker〔*RBW2*, pp. 275-276.〕は、ロックの言うこの区別を支持していない、両者は共に「信仰の確実性」があると考えている。

ロックは、「神の証言であると私が知っている場合には、神の証言に基づいて確実であるということはありうると私は考える」〔*RBW2*, p. 281.〕と言う。しかし、ロックに従えば、神の直接の啓示がなければ、神の証言であると知るということは不可能である。

21. アブラハムの信仰について論じたところでは、ロックは、アブラハムは世俗の祝福の約束を信じて、それ故に義とされた〔19章参照〕、と書いている〔*R*, p. 16. pp. 129-130.〕。しかし、アブラハムは、救い主が遣わされるという約束をも信じたことが、聖書には書かれている。

22. 救われるためには、「目に見えない、永遠の、全能の一神に対する信仰」以外には、「イエスは救い主であるという信仰」だけが必要である〔*R*, pp. 16-17.〕、とロックは言う一方で、「救い主は処刑され、三日目に死者の中から甦り、旧約に救い主について書かれていたすべてのことを成就された、このことを信じて悔い改める者は、救い主に対するこの信仰により、罪の赦しを受ける」〔*R*, p. 99.〕などと書いている〔14章参照〕。これは矛盾である。

ロックが引き合いに出している使徒行伝13：46.〔*R*, p. 26.〕, 10：43.〔*R*, p. 28.〕は、「イエスは救い主である」ということ以外の多くの箇条に触れている。聖ヨハネは、生命に到るのに「イエスは救い主である」ということ以外に信ずる必要があることを知ってはいなかった〔*R*, p. 101.〕というのもおかしい。ロックが挙げているヨハネ伝20：31. では、「イエスは救い主、神の子であると信ずる」とある（「救い主」と「神の子」とは同じことを表わしている、というロックの考えはおかしい〔11章参照〕）。またヨハネは、このことだけを信ずれば救われる、とは言っていない。聖書で信ずることが必要とされているすべてのことを信ずることが必要である。

23.〔最後の裁きの日に〕人間は不信仰の故に罰せられるのではない、悪行の故に罰せられる〔*R*, pp. 126-128.〕とロックは言う。――しかし、〔キリスト教の神に対する〕不信仰は、他のすべての罪の原因である罪である、生きた信仰があればそれ以外の罪は防げる。また、信仰がなければ、それ以外の罪は赦されない。マルコ伝16：16. ヨハネ伝３：18. を見よ。こうして、不信仰な者は罰せられて、天国を失う。

24. ロックは、信仰と悔い改め（だけ）が罪の赦しに必要である〔*R*, pp. 103-105.〕と言う。しかし、別のところでは、信仰と悔い改めの他に洗礼が必要である〔*R*, p. 104. p. 111.〕とも書いている。ロックは聖書に従い、信仰と悔い改めと洗礼が罪の赦しには必要であることを明確にすべきであった。

25.「霊に属する、特有の観念は、考えることと意志である」〔*HU*, Ⅱ, XXⅢ, 18. Cf. *RBW2*, p. 482.〕は、霊が非物質の実体であることを示している。魂の不死は、「人間は、死んだ時存在しなくなる」〔15章参照〕ということとは相容れない。しかし、ロックは、「霊には物質性がありうる」と言っているところがある〔*LBW*, pp. 34-35.〕。この考えは成り立たない。

26.「良心とは、自分自身の行為についての自分自身の意見にほかならない」〔*HU*, 1-３版, Ⅰ, Ⅲ, ８．４版では、「自分自身の行為についての道徳的正しさあるいは邪悪さに関する自分自身の意見あるいは判断」と書き改められた〕。――聖書の言葉に従えば、「意見」ではなく、「知識」、「証言」あるいは「判断」とあるべき。また、良心は、（自分及び他人の）行為だけに関わるのではなくて、言葉、考え、感情、目的、意図などにも関わる。

行為の善悪についてのわれわれの心の考察の最後の結果に従って行為することは、ロックの言う通り、人間の自由である〔*HU*, Ⅱ, XXI, 48.〕。しかし、人間は、現実には多くの場合に、肉の欲、それが引き起こす「落ち着かなさ」に従い、「最後の正しい判断」に反して行為する。

27. ロックは、「自分の生命を失う」（マルコ伝８：35.）を「死んで、存在しなくなること」と理解している〔*R*, pp. 11-12.〕が、「存在しなくなること」がどうしてマルコ伝８：38. で示唆されている「悪魔とその堕天使のために用意してある永遠の火」〔マタイ伝18：8. 25：41. マルコ伝９：43. 9：48. ルカ伝３：17. ヨハネ黙示録20：14.〕の苦しみと両立しうるのか。聖書では、「自分を捨て、自分の十字架を背負って、私に従う」（マルコ伝８：34.）ことのない者は、「魂もからだも地獄で滅ぼされる」（ルカ伝９：25. マタイ伝10：28. 参照）と言われている。

28. マタイ伝16：16. から、「イエスは救い主である」という信仰だけが人をキリスト者

にするのに必要である〔*R*, p. 18. p. 28. pp. 56-57.〕という推論は成り立たない。

HU, Ⅳ, XⅧ, 5．が「何かの啓示（例えば、聖書）が神からのものであるということは、われわれの直観的知識の対象ほど確実ではありえない」という意味であれば、私はそのことを否定する。

29.『キリスト教の合理性』では、基礎の信仰箇条は、「イエスは救い主である」ということだけであると言い、また、「イエスは神の子である」が必要であるとも言い、また、それ以外の、それに伴う信仰箇条を挙げているところもある〔11章、14章、22章参照〕。これでは、基礎の信仰箇条は何かは、極めて不確実である。

ロックは、原始教会では、使徒信条の信仰告白が教会にその構成員として受け容れられる唯一の条件であったが、私の言う基礎の信仰箇条はこれとほとんど変らない、また、私は使徒信条の信仰告白によって洗礼を受けたのであり、その中の何一つをも私は否認したことはない〔*2VR*, pp. 277-280.〕と言う。しかし、原始教会の信仰とロックの言う信仰とは、大いに違っている。また、ロックは、「からだの復活」を否認している。*RBW2*, pp. 333-334. では、*HU*, Ⅳ, XⅧ, 7．の「人間の死んだからだ〔*HU*原文は、人間のからだ〕は甦る」を次版〔4版〕では「死者は甦る」に変える、と言っている〔4版では、そのように書き変えられた〕。

30. ロックは、神の法は罪・義務を示し、評判法は徳・悪徳を示す〔*HU*, Ⅱ, XXⅧ, 7.〕と書いて、罪・義務と徳・悪徳とは別のものと考えている。しかし、罪・義務を示すべき法は、徳・悪徳を示すべき法と同じ法であり、それは神の法（ロックの言う自然法だけではなく、啓示の法をも含む）である。

本当の徳（徳と見なされているものではない）について言えば、「徳と称賛とはいたるところで一致している」、「徳と称賛は密接に結び合わさっており、同じ名で呼ばれていることが多い」〔*HU*, Ⅱ, XXⅧ, 11.〕とは言えず、両者は一致していないことが多いのが現実であり、両者は区別されてきた。但し、徳は称賛に値する、と言える。1．「誰も、自分自身が犯す誤りを、少なくとも他人が犯した場合には、非難しないほどに堕落している者はほとんどいない」〔*HU*, Ⅱ, XXⅧ, 11.〕とロックは言う。――ロマ書1：32. 箴言28：4．フィリピ書3：19. などと相容れない。2．「徳と称賛とはいたるところで一致している」（上述）は、「ある国で徳と見なされているものが、別の国では悪徳とされている」〔*HU*, Ⅱ, XXⅧ, 11.〕（これは正しい）と矛盾する。ロックは、聖書では、啓示を受けた教師も評判に訴えている（フィリピ書4：8.）〔*HU*, Ⅱ, XXⅧ, 11.〕と言う。しかし、これは、善悪を正しく判断している人々の評判、あるいは、評判に値するもの、の意味である。

31．聖書には、「からだの復活」という言葉はない〔*RBW2*, pp. 333-334.〕。――ロックの言う通りである。しかし、「からだの復活」を意味する言葉はある。ロマ書８：11．８：23．フィリピ書３：21.。

聖書には、「同じからだの復活」という言葉はない〔*RBW2*, p. 304.〕。――その通りの言葉はないけれども、それを意味する言葉はある。上述「からだの復活」に関わる個所のほか、コリント前書15：53．54.。

ロックは、「同じからだの復活」を否定してはいない〔*RBW2*, p. 323.〕と言う。――１．そうであれば、何故それに熱烈に反論するのか。２．聖書のどの個所が「同じからだの復活」を示しているのかを何も言っていない。ロックは、聖書は、死者は復活すると言っているけれども、それが同じからだで復活するかどうかについては何も言っていない、と言う〔*RBW2*, p. 305.〕。従って、聖書に何も言っていないと自分が考えていることをロックは信じてはいない、と言える。

ロックは、アダムの不従順の故に彼と子孫は死（存在しなくなること）を免れないことになったけれども、イエスの贖いにより最後の日に復活することになった、しかし、すべての人間は罪を犯したから、復活の時に神に義とされない人々は、その後第二の死を受ける〔*R*, pp. 4-12．p. 110.〕と言う。――これは、この世の後に来る「不死の魂の限りない悲惨、この上ない悲惨」〔*HU*, Ⅱ, XXI, 60. 70.〕、「永遠の火、永遠の罰」〔*R*, p. 127.〕とロックが言っていることと矛盾する。

ロックはまた、「来世の報いと罰は、この世の生活が差し出すことのできるどんな快さや苦しみに逆らっても〔われわれの〕選択を決定するに十分な重さがある」（*HU*, Ⅱ, XXI, 70．Cf. *HU*, Ⅱ, XXI, 60.）と言う。――このことは、「より大きな善」ではなくて、「その善がないために、われわれの欲求がわれわれを落ち着かなくさせる」ことがわれわれの選択を決定する（*HU*, Ⅱ, XXI, 35．Cf. *HU*, Ⅱ, XXI, 30.）ということと矛盾する。後段が示唆しているように、「来世の報いと罰」は、人間がそれをよく確信して、心からこの報いを求め、罰を恐れるのでなければ、その選択を決定することにはならない。

付論Ⅰ．*HU*, Ⅰ, Ⅲ, 15-19．におけるLord Herbert批判を検討して、ロックの批判の仕方――ロックは、相手が言っていないことを「言っている」と言う。一、二の個別の事柄について何かを言って、それで全体に対して答えたと思わせている。相手と同じことを言いながら、相手に反論していると言っている。相手の言っている言葉のあるものを省略し、あるいは別の言葉と取り換えて、反論している。自分が理解していることを理解していない、と言う。――が不当である典型例であるとしている。

付論Ⅱ．ロックとソッツィーニ派の考えを比較して、次のことを指摘している。

1．ソッツィーニ主義の独自な考えである三位一体、神の子の受肉、贖罪に関わる教義について、ロックは自分の考えを明確に示していない（8章、12章参照）。

2．ソッツィーニ派は、救い主はこの世の創造以前に父から生まれたことを否定し、従ってまた、救い主が神であることを否定している。ロックは、聖書の「神の子」という言葉は、キリストが神であることを意味するものではない、と言っている。

3．両者共に、「救い主the Messiah」と「神の子」とは同じ意味である、と言っている（2章参照）。

4．両者共に、異邦人を神の民とするのに必要な信仰は「イエスは救い主である」という信仰だけである、と言っている。

5．両者共に、神の観念は人間の心に生まれつき備わってはいない、何故なら、神の観念を持っていない人間や国民がいるからである、と言っている。

6．ソッツィーニ派は、からだから切り離されたものとしての魂は、復活の時までは感覚を持たず、何の行為もできず、何の喜びも享受できない、と言っている。ロックは、「死は生命と感覚の行為のすべてを失うこと」である、と言っている。

7．両者共に、アダムが神の命令に反したが故に、われわれの自然Natureは堕落したという原罪の考えを否定している。

8．両者共に、復活の時には、この世に生きていた時と同じからだが甦るのではない、と言っている。

9．ソッツィーニ派は、悪人がこの世の後、永遠の苦しみを受けることを否定している。ロックは、これと同じ考えのところ〔*R*, p. 6. 15章参照〕と「限りない悲惨」「永遠の火、罰」と書いているところとがある〔31章参照〕。

ミルナのこれらの考察の中で、過半の章の基本的論点は、エドワーズ、スティリングフリート、ロウドがロックの著作に関して既に指摘していたことと同じである。これらの人々が明確に指摘していなかった事柄としては、次のことがある。

1．人間は、心の考察の最後の結果に従わず、肉の欲、「落ち着かなさ」に従うことが多い（26章）。「来世の報いと罰」は、人間がそれをよく確信して、心からこの報いを求め、罰を恐れるのでなければ、その選択を決定することにはならない（31章）。

2．良心は、行為だけに関わるのではなくて、言葉、考え、感情、目的、意図などにも関わる（26章）。

3．悪人の「第二の死」は、「不死の魂の悲惨」、「永遠の火」と矛盾する（15章、27章、31章、付論Ⅱ）。

4．救いにとって洗礼は必要である（24章）。

これら以外のミルナ独自の議論の中で、5章、21章は副次的な論点であり、19章、23章はミルナの誤り、誤解に基づく議論である。

この四つの論点の中で、1は独創的なものではないけれども、重要な論点である[79]。2，3も、適切な指摘である。3に関しては、ロックは草稿Resurrectio et Quae Sequuntur（この草稿がいつ書かれたかは明確ではないが、ミルナの著書とほぼ同じ頃と考えられる）の中で、「永遠の火」と「第二の死」とを結び合わせた考えを書いている[80]。

こうして本書は、道徳に関しては、ミルナの考えの方がロックの考えよりも明確、適切なところがあることを示している。しかし、道徳の根底に関わる「キリスト教の神に対する不信仰は、他の罪の原因である罪である」（23章）という考えには、不信仰の者すべてを、自然法を守ろうとしている人々をも含めて、赦されない罪人であるとする、極めて偏狭な、自然法に適わない考えがある。

ロックとソッツィーニ派の考えの同一を指摘した付論Ⅱの4の論点は、『ラクフ派教義問答』の考えとは違っている。ミルナはEnjedinusを引用しているけれども、ミルナ自身がCrellius, Wolzogeniusの考えはこれとは違い、多くの箇条を認めている、と言っている[81]。しかし、『キリスト教の合理性』出版（1695）の頃には、スティーヴン・ナイStephen Nye（1648-1719）らイングランドのユニテリアンは、キリスト教が要求する信仰は、「この世のすべての人、物の創造主、管理者、裁き手である神に対する信仰」と、「神が遣わされた救い主としてのキリストに対する信仰」即ち「イエスは救い主であるということの信仰」だけである、と主張していた[82]。

9についても、ミルナはSmalcius, Wolzogenius, Ernestus Somnerusを引用しているけれども、『ラクフ派教義問答』は「永劫の火」を認めている。但し、その訳注には、後のユニテリアンはこれを否定した、と書かれている。ナイは、聖書では「罪人には地獄での永遠の罰が降りかかる」と言われていることを認め、これは「疑問の余地なく正当であり、当然である」と書いている。しかし、それに続けて、神は、この宣告した罰を「正義だけで

79）妹尾剛光「晩年のロック思想の展開『知性の導き方』と『パウロ書簡 義訳と注』」関西大学『社会学部紀要』32巻3号，2001, pp. 72-74.
80）同上，p.66. Cf. *PN*, Introduction, p. 53.
81）Milner, Appendix Ⅱ, pp. 184-185.
82）Stephen Nye, *A Discourse Concerning Natural and Revealed Religion*, London, 1696, pp. 123-124.

なく、最高の慈悲に適うように」執行される、と書き加えている[83)]。

Ⅱ．ジョン・ロック擁護

1．匿名『エドワーズの反論を検討する』1695.

匿名のソッツィーニ派の一人が書いた（anon.）*The Exceptions of Mr. Edwards, in his Causes of Atheism, Against the Reasonableness of Christianity, as deliver'd in the Scriptures, Examin'd;And found Unreasonable, Unscriptural, and Injurious. Also It's clearly proved by many Testimonies of Holy Scripture, That the God and Father of our Lord Jesus Christ, is the only God and Father of Christians*（『エドワーズ氏の無神論の原因における、聖書に述べられているキリスト教の合理性に対する反論を検討し、理性に反し、聖書に反し、有害であると判定する。また、聖書の多くの証言により、主イエス・キリストの神・父はキリスト信徒の唯一の神・父であることを明確に証明する。』), London, 1695.（*EEE*と略記する）では、まず、エドワーズの『キリスト教の合理性』批判を批判し、次にこの批判と関連させながら、エドワーズらの三位一体論を批判して、概略次のように書かれている。

Ⅰ．エドワーズの〔ロック[84)]〕『キリスト教の合理性』批判に対する批判

ロックは、キリスト者が信ずる必要があるのは〔創造主神に対する信仰を除けば〕「イエスは救い主である」ということだけである、と繰り返し言っている〔*E1*, p. 105.〕。――ロックは、この命題の中に1．同義の表現、「神の子」、「イスラエルの王」、「神に遣わされた者」など、2．救い主であることを示す表現、「聖霊によりはらまれた」、「死者の中からよみがえらされ、高められて、王、救い主とされた」など、3．イエスが救い主であることの恩恵を意味する表現、「罪を赦し、死者をよみがえらせ、この世を裁く力を父から与えられていること」など「この命題の意味を説明する」表現を含めている。しかし、

83) Stephen Nye, *A Discourse Concerning Natural and Revealed Religion*, London, 1696, p. 210.
84)『キリスト教の合理性』は匿名であり，本書ではその著者を「著者」などと呼んでいて，ロックの名はない。しかし，小論では以下，ロックと明示する。

これらを明確に理解して信ずる必要があるということではない。キリストが生きていた時の信者や使徒は、これらの多くを理解していなかった[85]。

マタイ伝28：19. から、三位一体、即ち、神は本質・本性に関しては一つであるが、その中で三つの位格Personsがあるということが、洗礼の時に必要な信仰箇条であることは、明らかである〔*E1*, pp. 105-107.〕。——使徒は、ここで言われていることに従わずに、常に「救い主イエス」の名において洗礼を授けた。三位一体論者の中でも、Sherlock, Cudworth, Fowler, Tillotson, John Howe, ニケア信条に従う人々ら現実三位一体論者Real Trinitariansは、「一つの本質」を信じないで、「三つの本質」を信じている[86]。

「キリストは神の言葉である」ということも信ずる必要がある〔*E1*, p. 107.〕。——聖書（ヨハネ伝１：１.）には、「キリスト」という言葉はない[87]。

「言葉は肉となった、即ち、神は受肉した」もそうである〔*E1*, p. 107.〕。——父は神でもあるから、父が受肉したのか、また、神が肉となったのであれば、神は神でなくなったのか[88]。

「神の子の永遠の生まれ Generation」も同じ〔*E1*, p. 108.〕。——これは、聖書にない言葉である[89]。

「父と子との統一」〔*E1*, p. 108.〕。——ヨハネ伝17：21. には、「父よ、あなたがわたしの内におられ、わたしがあなたの内にいるように、すべての人を一つにしてください。彼らもわたしたちの内にいるようにしてください。」とある。これは、二者が一者である、という意味だと言うのであれば、それは矛盾である[90]。

「書簡は、ロックの言う箇条以外の基礎の教えに溢れているが故にロックはこれを無視している。」〔*E1*, pp. 109-110.〕——ロックは、書簡には真理が書かれている云々〔*R*, pp. 152-156.〕と言っている。エドワーズは、これを無視している[91]。

「父、子、聖霊は一つの神あるいは神の本性である」は、「イエスは救い主である」と同じようにわかりやすい〔*E1*, p. 120.〕。——これをめぐっては、14, 5 世紀の間論争があり、今日のイングランドでも、名目、現実三位一体論者の間で論争がある。また、エドワーズが言っているこの言葉は、聖書にはない。それに対して、ロックが言っている言葉、説明

85) *EEE*, pp. 5-6.
86) *EEE*, p. 7.
87) *EEE*, p. 8.
88) *EEE*, pp. 10-11.
89) *EEE*, p. 12.
90) *EEE*, pp. 12-13. Cf. *EEE*, p. 25. p. 43.
91) *EEE*, p. 13. pp. 15-17.

は、聖書にあり、救い主、使徒の当時理解に難しいことはなかった[92)]。

Ⅱ．エドワーズら三位一体論者の神観念批判

エドワーズは、ソッツィーニ派の著者（Nye, Socinus, Crellius）に対しても、ロックに対するのと同じような仕方で非難して、「無神論の香りがする」〔*E1*, p. 64.〕と言っている。しかし、聖書には、「神は一つのPersonである」、「父（子や聖霊とは区別される）がその唯一の神である」、「父はキリストより上位にある」ことが書かれている。三位一体論者の半分程は、神は三つの神であるという三神論の否定において、ユニテリアンに同意している[93)]。

三位一体の考えは、言い伝えによるものであって、聖書や理性と矛盾する。この点では、それは教皇派の実体変化（化体）説と同じことである。従って、ロックが三位一体を救いに必要な信仰箇条から排除したのは、正当であり、敬虔なキリスト教信仰に基づく判断である。ロックが三位一体を救いに必要な信仰箇条から排除している（これは三位一体の否定と必ずしも同じことではない）、また、神の子は救い主にすぎないと解釈しているが故にソッツィーニ派であると言う〔*E1*, p. 113.〕ならば、福音書を書いた人々もまたソッツィーニ派である[94)]。

リンボルクLimborchもまた、三位一体の教えは真理ではあるけれども、人間をキリスト者にするのに必要な、基礎の真理ではない、と考えている。イングランド教会〔39箇条〕の第6条にも「聖書は救いに必要なすべてのことを含んでいる。従って、聖書の中に書かれていないこと、それにより証明されえないことは、誰にも信仰箇条として信ずることを要求してはならない」とある。エドワーズのように、これに反して、このようなことを基礎の信仰箇条として信ずることを要求することこそ、「無神論、理神論の大きな原因、主要な誘因である。」[95)]

エドワーズは、本書に対する批判を『ソッツィーニ主義の仮面を剝ぐ』*E2*（1696）の末尾（pp. 113-142.）に付論「もう一人のソッツィーニ派の著者に対する手短かな回答」として付けた。そこでは概略次のように書かれている。

ロックと著者（ソッツィーニ派）が互いに相手を知らない、と言っているのはごまかし

92）*EEE*, pp. 14-15.
93）*EEE*, pp. 17-32.
94）*EEE*, pp. 32-38.
95）*EEE*, pp. 38-47. Cf. *N 1*, p. 48.

であって、本書は、両者が互いに相手を知っており、同志であることを示している[96]。また著者は、ロックがこう言っている、と言いながら、彼の書物のどこにもない文を引用している[97]。

エドワーズのソッツィーニ派批判に対する本書の反論には、矛盾、ごまかし、不誠実、無知がある。ソッツィーニ派には無神論に向かう強い傾向がある、というエドワーズの主張が間違っていないことは明らかである[98]。著者は、彼が批判しているクエーカー〔*EEE*, pp. 44-46.〕と同じく、キリスト教徒のふりをしているけれども、キリスト教徒ではない[99]。

2．サミュエル・ボウルド『キリスト・イエスについての真の知識短論』1697.

ロック擁護者の代表的な一人にサミュエル・ボウルドSamuel Bold（1649-1737）がいる。ボウルドは、穏健カルヴァン派の聖職者であり、1674年から1688年までDorsetshire, Shapwickの代理司祭Vicar、1682年から死ぬまでPurbeck島のSteeple（1722年隣りの教区Tynehamがこれに統合された）の教区司祭Rectorであった。1682年の非国教徒擁護、称賛の説教とパンフレット（*A Sermon against Persecution*及び*A Plea for Moderation towards Dissenters*）の故に巡回裁判大陪審はボウルドを告発し、ボウルドは Bristol主教Gulstonの法廷に召喚された。この法廷でボウルドは「信仰のつまずきとなる誹謗中傷を書き説教した」と非難され、それに対する答弁書が一層不埒であるとして、主教から三回の自説撤回説教と告訴人（主教の執事）経費支払を命じられ、従わない場合は聖職停止とされた。更に、上記二著作及び同じ性格の書簡に対して罰金支払を命じられ、支払うまでの７週間投獄された。その後主教の突然の死によって、ボウルドのこの問題は打ち切りとなった。

ボウルドは1697年『キリスト・イエスについての真の知識短論』に（『キリスト教の合理性』及びその『弁護』を擁護し、エドワーズを批判する）『キリスト教の合理性及びその弁護の数節』を付け加えた合本を出版した。

Samuel Bold, *A Short Discourse of the True Knowledge of Christ Jesus*（『キリスト・イエスについての真の知識短論』）, London, A. and J. Churchil, 1697.（*B1*と略記する）の要旨は、次の通りである。

96）*E2*, pp. 117-118.
97）*E2*, pp. 119-121.
98）*E2*, pp. 122-139.
99）*E2*, pp. 135-138.

1．フィリピ書3：8．「わたしの主キリスト・イエスを知ることのあまりのすばらしさに、今では他の一切〔義認と救いに役立つと見えるもの〕を損失とみています。」にあるキリストについての知識とは、「神が罪人の救い主としてこの世に遣わすと約束された人*Person*は、イエスという名で普通知られている……人であった」ということ、即ち、「イエスはキリストである」ということを知ることである[100)]。

2．しかもこの知識は、「単なる思索における知識」ではなく、自分は罪人であると自覚して、イエス・キリストによる以外に救いは得られないということを自覚した時には、「自分を完全にキリスト・イエスに委ねて」、「〔信仰と行為において〕キリストを自分の主とする」ような知識である。この知識が、その人を本当のキリスト者にする[101)]。

3．この知識のすばらしさは、次の点にある。

①この啓示自体のすばらしさ。また、この啓示がその意図したことにふさわしく、われわれは救い主イエスに自分を委ね、その結果われわれには義認と救いが与えられるということ[102)]。

②イエスを自分の主として、イエスに自分を委ねる信仰は、人間に生まれつき与えられている力を使うのではあるけれども、神の恵み、聖霊の働きによる[103)]。

③この知識によってわれわれに生ずる利益。i．神は、キリストに自分を完全に委ね、従う者を義として、行ないの法the Law of Worksから解き放ち、恵みの誓約に与らせる。ii．この知識によって、人間には、キリストに対する従順を行なう力が与えられる、言い換えれば、キリストを愛させて、キリストの言うことに従うようにさせる。人間のこの行ないは、最善の行ないでさえ、救いに価する行ないではないけれども、新しい誓約の仲立であるキリストの働きによって、われわれは、キリストが受けるに価する恵み、キリストの血によって購われた救いを無償で受けるのである[104)]。

④この知識以外の空しい好奇心、空論、現世の事柄における過信を抑えて、イエス・キリストが教え、啓示したことに自分の力を集中させる[105)]。

4．この知識を持っている人は、それ以外のことについても正しい知識を持つ。この世の楽しみ、特権、外的行ないを悪、無用と考えることはないけれども、義認、救いを得るには無用、有害と考える。救いにとっては、キリストを信じ、キリストに寄り頼むことが唯

100) *B1*, pp. 6-7.
101) *B1*, pp. 7-13. pp. 27-29.
102) *B1*, pp. 13-15.
103) *B1*, pp. 15-18.
104) *B1*, pp. 18-23.
105) *B1*, pp. 23-24.

一の、また、それだけで十分なことである[106]。

こうして人間をキリスト者にするのは、「イエスはキリストである」というこの一つのことの正しい知識であるけれども、本当のキリスト者は、キリストが教え、啓示したこれ以外のことを知ろうと努め、そうして知ったことに同意し、それを受け容れるはずである[107]。

キリストが教え、啓示したこれらのことを整理すれば、次のようである。

1．キリストのPersonに関わること。キリストは「神」、「神の子」（新約聖書では、「救い主」と同義で使われていることが多い。ソッツィーニ派の言うように、「キリスト・イエスは救い主であるが故に神の子である」とは私は考えない[108]）、「父の独り子」、「すべてのものの神」、「永遠にほめたたえられるもの」（ヨハネ伝1：1．ロマ書9：5.）、「キリストは肉となった」（ヨハネ伝1：14．マタイ伝1：16．ルカ伝1：31.）。

2．キリストの働きを必要とするきっかけとなる事柄に関わること。「われわれの最初の親の堕落により、罪はこの世に入った。」、「われわれは皆神の栄光を受けられなくなっている。」、「生まれながら、神の怒りを受けるべき者である。」（ロマ書3：23．5：12．エフェソ書2：3.）

3．神が救い主を遣わされたのは、全く「神の無償の恵み、慈悲、愛」によること（ヨハネ伝3：16-17．ヨハネ第一書4：9．エフェソ書2：4-9.）。

4．キリストがされたこと。①父と父の意志をこの世の人々に示された（ヨハネ伝1：18．15：15．ヘブライ書1：1-2.）。②正しいことをすべて行ない、汚れ、偽りのない生活を送られた（マタイ伝3：15．ペトロ前書2：21．使徒行伝10：38.）。③多くの苦しみ、非難、侮辱を受け、十字架の上で悪人として死に、この世の罪に対する神の正義をかなえる犠牲として御自身を捧げられた（使徒行伝2：23．36．ヘブライ書9：26．ペトロ前書3：18．テモテ前書2：6.）。④三日目に死者の中からよみがえられた（コリント前書15：4．ロマ書1：4．4：25.）。⑤天に昇られた（マルコ伝16：19.）。⑥聖霊を遣わして、御自身が言われたことを確認し、罪人を回心させ、信仰ある者の心を啓き、なぐさめられる（ヨハネ伝14：16．17．26.）。キリストは、「父と子と聖霊は神である、この三者は一つである」（マタイ伝28：19．ヨハネ第一書5：7.）と教えられた。これを信ずることは、これを教えたイエス・キリストに自分を委ねることから当然に生まれてくることで

106) *B1*, pp. 24-27.
107) *B1*, pp. 29-33.
108) *B1*, p. 34.

ある。これを越えることは、傲慢な人間が付け加えたことであり、拒否すべきことである。しかし、この教えは理性に反する、と言うことは、イエスが救い主であるということを否定することである。⑦この世の終りには栄光の中に来られて、死者をよみがえらせ、この世を裁き、各人にその行ないに応じて報いを与えられる（使徒行伝10：42．17：32．コリント後書5：10.）。

5．避けるべき悪い行ない、行なうべき道徳の義務（テトス書2：11-12．コリント後書7：1.）。

6．キリスト・イエスを正しく知る者が得る利益、賜物。聖霊に与り、聖霊の神殿となる（コリント前書6：19．ロマ書8：9.）。罪を赦され、義とされ、新しい誓約に入れられ、聖化され、神の本性に与る（エフェソ書1：7．コリント前書6：11．ペトロ後書1：3-4．ロマ書3：24.）。神の子となる（ヨハネ伝1：12．ガラテヤ書3：26．ロマ書8：14-15.）。次の世には永遠の生命と幸福を受け継ぐ（テサロニケ後書1：10．マタイ伝25：21-34.）など。

7．キリストが制定した洗礼、聖職叙任、聖餐の儀式（マタイ伝28：19-20．エフェソ書4：11．マタイ伝26：27-28．コリント前書11：23.）[109]。

ボウルドのこのキリスト論において、人間を本当のキリスト者にするのは、「イエスはキリストである」ことを知ることである、という考えは、ロックの考えと同じである。また、これと関連して書かれていることにも、ロックと同じ考え（但し、伝統的なキリスト教の考えでもある）が多くある。しかし、アダムを通しての原罪、贖罪、三位一体に関しては、ボウルドの考えは、伝統的なキリスト教の考えに沿っており、ロックの考えとは違っている。

三位一体に関してボウルドはロック宛書簡（1699年10月2日付）で、Pierre Allix(anon.), *The Judgment of the Ancient Jewish Church, Against the Unitarians, in the Controversy upon the Holy Trinity, and the Divinity of our Blessed Saviour*, 1699．の三位一体論を批判して、次のように書いている。

三位一体で使われているPersonという言葉は、人間に使われる場合の厳密な意味とは違う、「わたしたちが届けるところをはるかに越えている、実体一般あるいは神を実体と言う時の実体と同じくわたしたちが明瞭な観念を持っていない何かを表わしています。」従

109）*B1*, pp. 34-49.

って、「父と子と聖霊は一つの神であるということは、神の啓示がそれを教える時わたしたちの信仰箇条である、ということは、非常に理性に適っています、そして、どのようにしてそれらは一つの神であるのかと尋ねられる時に、どのようにしてそうであるのかは啓示されていないからわたしたちにはわからないと答えることは、理性に照らして満足がゆくと判断されます」、しかし、それらは人間について言われる時と同じ意味の三つの現実のpersonsであるということは、神の啓示にはなく、人間が作り出したことである[110)]。

3．サミュエル・ボウルド『キリスト教の合理性及びその弁護の数節』1697.

『キリスト教の合理性』*R*及びその『弁護』*VR*を擁護し、エドワーズを批判したSamuel Bold, *Some Passages in the Reasonableness of Christianity, &c. and its Vindication With some Animadversions on Mr. Edwards's Reflections on the Reasonableness of Christianity, and on his Book, Entituled, Socinianism Unmask'd*（『キリスト教の合理性及びその弁護の数節。エドワーズ氏のキリスト教の合理性考察及びソッツィーニ主義の仮面を剝ぐという題の書物に対する批判を付す。』）, London, A. and J. Churchil, 1697.（*B2*と略記する）の要旨は、次の通りである[111)]。

Ⅰ．〔ロック（匿名）〕『キリスト教の合理性』*R*

ここでロックは、人間をキリスト者にするのに信ずる必要のあることは唯一つ「イエスはキリスト、救い主である」ということである〔*R*, p. 102.〕ということを明確に証明している。しかもこれは、「単なる観念としての知識」ではなくて、「イエスを自分の王、支配者として受け容れさせる信仰」〔*R*, p. 110.〕である。この一つ以外の事柄も、それが神の啓示であると知った時には、信じられるべきものである〔*R*, p. 156.〕と書かれている[112)]。

Ⅱ．エドワーズ『無神論の原因・誘因についての考察』*E1*における『キリスト教の合理性』批判

ロックは、「キリスト者が信ずる必要のあることは、イエスは救い主であるということ

110）*The Correspondence of John Locke*, Vol.6, Letter No.2628.
111）*B2*には，ロックの名はない。しかし，小論では，ロックと明示する。
112）*B2*, pp. 1-3.

だけである」と繰り返し言っているけれども、これ以外にも必要な信仰箇条はある〔*E1*, pp. 105-108.〕。――エドワーズが信ずる必要があると言っていることの明確な知識は、人間をキリスト者にするのに必要である、とキリスト（や使徒）は定められた、ということをエドワーズは証明していない[113]。

書簡には、これ以外の基礎の教えが一杯ある。ロックはこれを無視している〔*E1*, pp. 109-111.〕。――「基礎の教え」とは、どういう意味かが不明確。ロックは『キリスト教の合理性』では、キリスト者であるために信ずる必要のあることを明らかにしようとしたのであって、書簡にある重要な教えの研究は、それとは関係がない[114]。

ロックの上述の主張の根拠は、「すべての人間は自分の宗教を理解すべきであるからである」〔*E1*, p. 115.〕。――そういうことは、どこにも書かれていない。『キリスト教の合理性』には、神がそれ以外のことをキリスト者に必要なこととして要求はされなかったからである〔*R*, p. 157.〕と書かれている[115]。また、それ以外の神の啓示も信仰の対象である〔*R*, p. 156.〕と書かれている[116]。

Ⅲ.〔ロック（匿名）〕『キリスト教の合理性の弁護』*VR*

この『弁護』では、ロックの意図が、人間をキリスト者にするのに信ずる必要のある信仰箇条は何かを示すことにあったということが明確に述べられている[117]。

Ⅳ. エドワーズ『ソッツィーニ主義の仮面を剝ぐ』*E2*

1．人間をキリスト者にするためには、「イエスは救い主である」以外に信ずる必要のあることがある〔*E2*, 1, pp. 5 - 8.〕。――エドワーズは、人間をキリスト者にするのに必要な信仰箇条〔『キリスト教の合理性』の主題〕と、キリスト者になった者がキリストの教えであるが故に信ずる必要のある、それ以外の信仰箇条とを混同しており、従って、彼が証明すべきことを証明していない[118]。

2．ロックは、基礎の信仰箇条を書簡に求めなかったのは、一つには、書簡は既にキリスト者である者に対して書かれたからである、と言う。しかし、同じことは、福音書についても、使徒行伝についても言える〔*E2*, 3, pp. 37-38.〕。――ロックの趣旨は、書簡はキ

113) *B2*, pp. 3-5. p. 10. p. 13.
114) *B2*, pp. 5-9.
115) *B2*, pp. 10-12.
116) *B2*, pp. 12-13.
117) *B2*, pp. 13-17.
118) *B2*, pp. 18-25. pp. 36-39.

リスト者に対して書かれたということにあるのではなくて、書簡の主旨は、人間をキリスト者にするのに信ずる必要があることを教えること（福音書、使徒行伝の主旨はこれである）ではなかったということにある[119]。

もう一つの理由は、書簡では基礎の信仰箇条がそれ以外の真理と区別されずに混ざり合っているからである、と言う。同じことは、福音書についても言える〔*E2*, 3, pp. 40-41.〕。——ロックは、人間をキリスト者にするのに必要な信仰箇条は、福音書、使徒行伝の中に一番適切に見出され、見分けられるからである〔*VR*, pp. 167-168.〕と言っている[120]。

エドワーズは、必要な真理は、その本性と重要性によって、それ以外のものとは区別される〔*E2*, 3, p. 41.〕と言う。——真理信仰の必要性は、キリストがそれを教え、啓示されたと知ることに基づいている[121]。

3．エドワーズは、「本当の福音の信仰は、福音書に差し出されている救い主を〔知性によってだけではなく〕心から受け容れることである。」〔*E2*, 4, p. 56.〕、ロックはこのような信仰に何も触れていない、従って、彼はそのような信仰があると信じてはいない〔*E2*, 4, pp. 56-57.〕と言う。——『キリスト教の合理性』でロックが取り上げて論じているのは、「主観的に考えられたキリスト教信仰ではなくて、客観的に考えられたもの、即ち、人間をキリスト者にするのに信じられなければならない箇条は何かということについてであった」[122]。従って、エドワーズの推論は成り立たない。その上、『キリスト教の合理性』には、「主観的な信仰」について書かれているところがある〔*R*, p. 104. pp. 110-129. p. 157.〕。

ロックは、上述の一つのこと以外のことをキリスト者は知ったり、信じたりする必要はない、と言っている〔*E2*, 4, p. 59.〕。——それとは正反対のことが『キリスト教の合理性』には書かれている[123]。

4．エドワーズは、新約聖書には「イエスは救い主である」という信仰箇条がそれだけで繰り返し出てくるのは何故か、と自問して〔*E2*, 5, pp. 73-74.〕、こう答えている。i．「イエスは約束された救い主であると信ずることは、キリスト教への第一歩であった」〔*E2*, 5, p. 74.〕。——これは、エドワーズの考えにすぎない。「イエスはキリストであると信じて、イエスが教え、命じたと知るに至ることを信じ、行なうよう自分を無条件で委ねきる

119) *B2*, pp. 25-27.
120) *B2*, pp. 27-29.
121) *B2*, pp. 29-30.
122) *B2*, p. 31.
123) *B2*, pp. 30-33.

こと」は、「キリスト教への第一歩」ではなくて、「キリスト教の信仰」そのものである[124)]。ii．この一箇条だけが言われているところでも、同時に他の信仰箇条が差し出されていた、と考えられる〔*E2*, 5, p. 76.〕。――これは、推測であって、証明ではない[125)]。iii．キリスト教信仰については、聖書の複数の個所に書かれているから、それを探し出して信仰を完全なものにしなければならない〔*E2*, 5, pp. 76-77.〕。――それはその通りであるけれども、人間をキリスト者にして救いに与らせるのに必要な信仰箇条は、キリストや使徒が教えたすべての信仰箇条ではない[126)]。iv．キリスト教は、聖霊の教えに従い、徐々に形成されてきた。従って、キリスト教の必要な教えのすべてが、救い主の時に明確に公示されていたのではない〔*E2*, 5, p. 78.〕。――それはそうであるけれども、使徒の時に人間をキリスト者にした信仰は、今人間をキリスト者にする信仰と同じ信仰であるはずである[127)]。

5．エドワーズは、ロックは「三位一体」や「救い主は神であること」を言っていない、聖書の特定の文章が三位一体を示していると解釈していない〔*E2*, 6, pp. 82-83.〕と言う。――それは『キリスト教の合理性』のテーマではない。その上、「イエスは救い主である」と信ずることが人間をキリスト者にするのに必要な信仰のすべてであると主張するが故に、彼は三位一体否定論者あるいはソッツィーニ派である、と言うことには根拠がない。「三位一体」や「イエスは神である」という信仰は、人間をキリスト者にする信仰ではなくて、イエス・キリストの教えであるが故にキリスト者が受け容れて信ずることである。また、エドワーズは、「救い主」と「神の子」は、救い主の時にはユダヤ人の間では同じ意味の言葉であったというロックの指摘を批判しているけれども、それは間違っているということを何も証明していない[128)]。

6．ロックは、キリストがこの世に来られたことの利益を論じたところで、キリストの贖罪について何も言っていない。これは、ロックがソッツィーニ派であることを示している〔*E2*, 7, p. 94.〕。――この利益について何も言っていないということは、この利益を否定したということにはならない。更に、贖罪は、厳密に言えば、利益ではない。キリストがこの世に来られた主な目的、その大きな利益は、われわれに罪の赦し、聖霊を与え、永遠の栄光と至福を確保することである。『キリスト教の合理性』では、後の二点は、キリストがこの世に来られた利益を論じたところで述べられており、第一の点は、書物の前半で述

124) *B2*, pp. 34-39.
125) *B2*, pp. 40-41.
126) *B2*, pp. 41-43.
127) *B2*, pp. 43-45.
128) *B2*, pp. 45-47.

べられている。贖罪は、キリストがこれらの利益を手に入れられた道筋を教えている[129]。

『キリスト教の合理性』は、とりわけ二つのことに役に立つ。ｉ．イエスは救い主であることを人々にしっかりと信じさせることによって、多くの人々が理性に従い、賢明な選択としてキリスト者になることを期待できる。更に、キリストが教えたそれ以外の真理、教えを探し出して、それに従うようにさせる。ii．宗派を打ち壊して、キリスト者の間の平和、やさしさを推し進める[130]。

『キリスト教の合理性及びその弁護の数節』*B2*は、人間をキリスト者にするのに信ずる必要があるのは、「イエスは救い主である」ということだけである、この信仰は、「イエスを自分の王、支配者として受け容れる信仰」であり、「イエスが教え、命じたと知るに至るそれ以外のことを信じ、行なうよう自分を無条件でイエスに委ねる信仰」であるという『キリスト・イエスについての真の知識短論』*B1*の考えが『キリスト教の合理性』の考えの核心でもあると理解して、『キリスト教の合理性』をエドワーズの批判から弁護したものである。従って、原罪、贖罪、三位一体は、「イエスが教えたと知った時に信じられるべきこと」の中に入れられており、『キリスト教の合理性及びその弁護の数節』の議論の中心ではない。そのために、ボウルドがこれらの点についてロックの考えと『キリスト・イエスについての真の知識短論』に書かれている自分の考えとの間の違いに気がついていたかどうかは不明瞭であり、少なくともその違いに気がついていたということを明確に示す言葉はどこにもない。

エドワーズは、『ソッツィーニ派の信条』の後書として、ボウルド『キリスト・イエスについての真の知識短論』と『キリスト教の合理性及びその弁護の数節』に関する「簡単な考察」を付け加えた。その要旨は、次の通りである。

1．『キリスト・イエスについての真の知識短論』に関する考察

「彼〔ボウルド〕は、自分が立てる命題そのものを、即ち、人間をキリスト者にするのに信ずる必要がある唯一つの点あるいは箇条があるという命題〔*B1*, pp. 6-7.〕を否定している。」即ち、誠実なキリスト者は、キリストが教え、啓示された（「イエスは救い主である」ということ以外の）多くのこと（エドワーズが主張したのと同じ命題、例えば、

129）*B2*, pp. 47-49.
130）*B2*, pp. 49-52.

「キリスト・イエスは神である」[131]、「聖霊は神である」[132]）を理解し、それに同意することが必要であり、不可欠である〔*B1*, pp. 29-33.〕、と言っている。これは、彼の言う「イエスは救い主である」という一つの命題への同意だけでは、その人を本当のキリスト者にするのに十分ではない、ということである[133]。

「あなた〔ボウルド〕は、あなた自身とあなたの職務を貶めて、*L*〔ロック〕氏の職人となって（彼自身は、自分の職で働くのをやめてしまったように見える）ラクラ主義の密使の仕事を受け容れている」[134]。これからもこういう調子で書き続けるのであれば、「あなたは、キリスト教の説教者というよりは、トルコのスパイである」[135]。

2．『キリスト教の合理性及びその弁護の数節』におけるエドワーズ批判に関する考察

この書物には*S. B.* の名がついているけれども、実際は、*J. L.* や*A. &J. C.* が書いたものに*S. B.* が手を入れたものではないか、と推測している[136]。続いて、「唯一の信仰箇条」について、後書の1に書かれたのと同じことが繰り返されている[137]。その後に次のことが書かれている。

ボウルドは、「神の子と救い主とは全く同じ意味の言葉ではない、否、ユダヤ人の間ではそうは考えられていなかった」〔*E2*, 6 , pp. 83-92.〕という私の指摘に対して、何の議論もせずに、私はそのことを証明していない〔*B2*, p. 47.〕と言っている[138]。『キリスト教の合理性』〔初版〕191-192頁〔*R*, pp. 101-102.〕では、「〔ロックの〕主観的信仰が（そこでは主観的とは言われていないけれども）語られている、しかし、それは非常に間違った、歪んだものである」〔Cf. *E2*, 4 , p. 57.〕[139]。『キリスト教の合理性』の考えは、「党派、否、それ以上に悪いものの役に立っている」[140]。

ロックは、エドワーズの『ソッツィーニ派の信条』の後で出版された『キリスト教の合理性の第二弁護』*2VR*の「読者への序」の中で、エドワーズを「〔『キリスト教の合理性』をめぐる〕論争において真理と宗教に対して真の関心を持っていない」（*2VR*, p. 183.）と批判する一方で、ボウルドは「福音に真に仕える者」であって、高い評価が与えられるべ

131）*E*, p. 242.
132）*E*, p. 243.
133）*E*, pp. 240-244.
134）*E*, pp. 245-246. Cf.「ソッツィーニ派の人々は、理神論者の職人にすぎない」（*E2*, p. 135.）
135）*E*, p. 248.
136）*E*, pp. 250-254. p. 262.
137）*E*, pp. 254-256.
138）*E*, p. 257.
139）*E*, p. 258.
140）*E*, p. 264.

きである（*2VR*, p. 185.）と書き、『キリスト教の合理性』の「真意を理解し」、それを「弁護」したボウルドに敬意を表している（*2VR*, p. 189.）。

『第二弁護』を読んだボウルドは、Awnsham〔and John？〕Churchill宛書簡（1697年3月26日付）で、ウスター主教はロックの主張を誤解しており、彼の議論は決定的なものではない、と書き、この書簡に同封して回送を依頼した『キリスト教の合理性』の著者宛書簡（同日付）（この書簡にはロックの名はないが、チャーチル宛書簡にはある）では、『キリスト教の合理性』の著者に対し、世間で反感を持たれてきた自分を公然と評価してくれたことに心からの感謝をあらわすとともに、『キリスト教の合理性』は、人々を分裂へと走らない「思慮深くしっかりとしたキリスト者」にするのに大いに役に立つし、それは「恵みの誓約」についてこれまで読んだどの本よりも満足のゆく説明をしており、そこでとられている方法は「理神論者を納得させて彼等にキリスト教を信じさせるのに唯一適切、有効な方法」[141] である、と書いている[142]。

4．サミュエル・ボウルド『エドワーズに対する返答』1697.

ボウルドは、エドワーズ『ソッツィーニ派の信条』後書に対する反論として、Samuel Bold, *A Reply to Mr. Edwards's Brief Reflections on A Short Discourse of the True Knowledg of Christ Jesus, &c. To which is prefixed A Preface, Wherein something is said concerning Reason and Antiquity, in the chief Controversies with the Socinians*（『キリスト・イエスについての真の知識短論云々に関するエドワーズ氏の簡単な考察に対する返答。序が前置きされ、そこではソッツィーニ派との主要な論争にある理性と古さに関わることが言われている。』），London, A. and J. Churchill, 1697.（*B3*と略記する）を書いた。その概要は次の通りである。

エドワーズは、「私〔ボウルド〕は、自分が立てた命題〔「人間をキリスト者にするのに〔知り〕信ずる必要がある唯一つの〔イエスは救い主であるという〕点あるいは箇条がある」〕を否定している」〔*E*, p. 240.〕と言う。――私は、「本当のキリスト者は、〔イエス・キリストが教えたと知る〕それ以外のこと（箇条）を信ずる必要がある」と言っている[143]。

141）Cf. *2VR*, p. 188. p. 265. p. 375.
142）*The Correspondence of John Locke*, Vol.6, Letter No. 2232. 2233.
143）*B3*, pp. 4-5.

それ以外のこととは、例えば、「イエスは神である」[144]、「聖霊は神である」[145] などである。これは矛盾ではない。「イエスは神であると人が正しく信ずることができるのは、その人が〔イエスは救い主であると知って〕キリスト者になり、自分がキリスト即ち救い主と信ずるイエスがそのことを教えたと知るが故にそのことを信ずる時……である。」[146]

イエスは救い主であると信じていない者は、キリスト者が信ずるべきそれ以外の多くの箇条については、「自然の光と理性だけに従って判断」して、それと同次元の、それにかなうものしか認めないであろう。従って、人間をキリスト者にするのに多くの信仰箇条が必要であるならば、キリスト者でない人間は、それらを自然の、理性の力によっては認めることができないから、多くの者はソッツィーニ派になるであろう[147]。

「真の生ける神を信ずること〔*E*, p. 242.〕は……自然宗教のまさに第一の原理、根底である。」しかし、イエスは救い主であると知ることなく、イエスは神であると知ることは、その人間を有神論者Theistにはするけれども、キリスト者にすることはない[148]。

一つの箇条かそれ以上の箇条かどちらを信ずることが人間をキリスト者にするのに不可欠に必要であるかを決めるのは、人間ではなくて、新約聖書、そこでキリストやその使徒が言っていることである。そこでは多くの教えが啓示されているけれども、「イエスは救い主である」という一つの箇条だけが人間をキリスト者にするのに不可欠に必要であると言われている[149]。

「救い主」と「神の子」とは同じ意味の言葉ではないということは当然である。しかし、エドワーズは、「〔この二つは〕当時のユダヤ人の間で同義の言葉ではなかった」という彼の主張〔Cf. *E*, p. 257.〕を証明してはいない。言葉は、「同じ一つの対象、ものを表わし、示すのに同じように使われている」時、同義synonimousと言われる。「救い主」と「神の子」とは、イエスを指す言葉としては、区別なく使われていた[150]。

私は、『キリスト教の合理性』の著者が新約聖書にある個々の教えについてどう考えているかを知らない。「彼は、私の知っている限りでは、そのどの教えにおいても、この世のどの人間にも劣らず正統でありうる。」しかしそれはいずれにせよ、彼に「知性の同意だけで

144) *B3*, p. 13.
145) *B3*, p. 18.
146) *B3*, p. 14. Cf. *B3*, p. 31.「イエスは救い主であると信ずる者は皆，イエスが教えたと知っているあらゆる命題が〔自分がそれを理解できなくても〕真であることに同意するはずである。」同意しない者は，「イエスは救い主である」と信じている，とは言えない（*B3*, The Preface, p. vi. p. xi. Cf. *B3*, The Preface, p. ix. p. xiii. p. xvi.）。
147) *B3*, pp. 14-16.
148) *B3*, pp. 17-18.
149) *B3*, pp. 21-25. p. 33. pp. 42-43.
150) *B3*, pp. 39-41.

なく、意志の同意、是認、また、堅い信頼、寄り頼み」があることは確実である[151]。

序では、本論での基本的な考えが繰り返されていると同時に、次のことが書かれている。

聖書に反対する者は、聖書にはない教えを信ずる必要がある教えであると主張し、あるいは、イエスや使徒が述べている言葉に自分流の意味、解釈を結びつけて、聖書にある教えを変えた。後者に属するのは、キリストは神であることや三位一体に反対する者である[152]。

最近のソッツィーニ派と正統派の論争は、「古さと理性」に拠って行なわれている。しかし、聖書にあるある教えが真であるかどうかを決めるのは、イエス・キリストの証言であって、古さや理性ではない[153]。

理性と啓示とは違うものである。われわれの自然の力だけによって、聖書にある物事の明瞭・明確な観念を作ることができるならば、啓示は不必要である（ソッツィーニ派の人々は、そう言おうとしているようである）。しかし、実際はそうではない。キリストの教え（啓示）は、われわれが自然の観念を持つことができないものについての教えである[154]。

これらは、『キリスト・イエスについての真の知識短論』、『キリスト教の合理性及びその弁護の数節』で言われていたのと同じ考えである。

エドワーズは、『キリスト教信仰の基礎箇条弁護』*E3*（1697）の付論で、この『返答』*B3*を次のように批判している。

ボウルドは、「〔ロックの〕成り上り者の思いつきを、特に〔「イエスは救い主であるという信仰は、人間をキリスト者にするのに不可欠に必要な唯一の箇条である」〔*B3*, The Preface, p. iv.〕という〕唯一の箇条を（それ以外のキリスト教のすべてのことに対する挑戦を伴っているのであるが）弁護しようと心に決めている。」[155] キリストがそれ以外のことを啓示したとしても、人間はそれを信ずる義務はない〔*B3*, The Preface, p. v.〕、と書いている[156]。

1．これは、*Christianity not mysterious*の著者の「神の啓示は、同意の動機でも、われわれの信念の根拠でもない」という考えに従っている。

151）*B3*, p. 44.
152）*B3*, The Preface, p. vii.
153）*B3*, The Preface, pp. viii-ix. pp. xiv-xv.
154）*B3*, The Preface, pp. ix-x. pp. xii-xv.
155）*E3*, p. 93.
156）*E3*, pp. 96-97.

2．「〔聖書を読んで得られる〕知識と信仰とを切り離して、宗教を、キリスト教そのものを単に観念の、思索のものにする。」

3．「聖書が持つ神の権威に対する挑戦」である。

4．彼が主張している「唯一の箇条」さえ、信ずる根拠はないことになる。

5．「啓示宗教のすべてを破壊する。」[157]

それ以外のことでも、彼の言っていることは「自己矛盾」であり、また、「苦労して作り出した言い逃れ、ごまかし、言い抜け」である[158]。

例えば、彼は、「本当のキリスト者は、聖霊は神であるということを信じなければならない」〔*B3*, p. 18.〕とも言っている。――これは、「唯一の箇条」という考えと矛盾する[159]。

また彼は、「唯一の箇条」はキリスト者の数を増やすのに役に立つ〔*B3*, The Preface, p. vi. pp. 14-15. p. 24.〕、と言う。――「唯一の箇条」を信じて、他の箇条を信じない者をキリスト者と言えるか。また、論争をなくすことがよいことであるならば、信仰箇条は何もない方がよりよいであろう[160]。

このような考えは、「キリスト教の基礎をくつがえし、無信仰を持ち込み、われわれを理神論者の群れに、次には無神論者のところに追いやろうとする」ものである[161]。

「神の子」と「救い主」は同じ意味の言葉ではない、という私の主張に対する反論〔*B3*, pp. 39-41.〕も、同様に聖書に根拠のないことである[162]。

こうしてエドワーズは、ボウルドのことを「ロック氏の改宗者の一人」[163]、「ロック氏の弟子」[164]、「ホッブズ氏とロック氏が打ち立てた偶像の盲目的崇拝者」[165] と書いている[166]。

これもエドワーズが既に言っていたのと同じ考えである。

---

157) *E3*, pp. 97-99.
158) *E3*, p. 99.
159) *E3*, p. 100.
160) *E3*, pp. 102-103.
161) *E3*, p. 104.
162) *E3*, p. 107.
163) *E3*, p. 92.
164) *E3*, p. 98.
165) *E3*, p. 106.
166) Ⅱ．3及び4に述べたことから、*The Correspondence of John Locke*, Vol. 6にあるNo. 2232. ボウルドのロック宛書簡の解説66頁24-25行目の個所は明らかに間違いであるし、また、このすぐ前の叙述にも混乱がある。

5．サミュエル・ボウルド『キリスト教の合理性批判の考察』1698.

匿名『キリスト教の合理性批判』*AR*を批判したSamuel Bold, *Observations on the Animadversions (Lately Printed at Oxford) on a Late Book, Entituled, The Reasonableness of Christianity, As delivered in the Scriptures*（『近著、聖書に述べられているキリスト教の合理性に対する（最近オックスフォードで印刷された）批判の考察』）, London, A. and J. Churchill, 1698.（*B4*と略記する）の要旨は、次の通りである[167]。本書では、『キリスト教の合理性及びその弁護の数節』*B2*でと同じく、『キリスト教の合理性』*R*、その『弁護』*VR*に言及していると同時に、それに加えて『第二弁護』*2VR*の該当個所の頁番号をも挙げて、それを参照させている。

最初に「序についての考察」があるが、そこに書かれていることの趣旨は、本論の中で繰り返されているので、これは独立しては取り上げない。

Ⅰ．書簡の弁護についての考察

ボウルドのここでの、更には本書全体を貫いている基本的な主張は、次のことである。

『キリスト教の合理性』でのロックの意図は、「人間をキリスト者にするために、即ち、救いのために明確に信ずることが絶対に必要なこと」[168] は何かを明らかにすることである。ロックは、啓示こそ信仰の唯一の根拠であると考えて[169] 聖書を綿密に検討した結果、福音書と使徒行伝がこのことを「最も明確、明白に知らせている」[170] ことを知り、「唯一の真の生ける神」に対する信仰に加えて、「イエスはキリスト、救い主であると適切に信ずること〔だけ〕が人間をキリスト者にする」[171] ことを明らかにした。これは、イエスを自分の主、王とする信仰、従って、イエス・キリストが聖書の中で教え、啓示されたと知ったことはどんなことでも、それがイエス・キリストの教え、啓示であるが故に、信じ、行なうようにさせる――これは、「救いの条件である信仰の真正、必然の成果、効果」[172] ――信仰である[173]。

ロックは、書簡にも、「人間をキリスト者にするのに、即ち、救いに絶対に必要である

167）*B4*には，ロックの名はない。しかし，小論では，ロックと明示する。
168）*B4*, p. 25.
169）*B4*, pp. 23-26.
170）*B4*, p. 70. Cf.「福音書と使徒行伝において一番適切に見分けられる」（*B4*, p. 9. p. 10. *VR*, pp. 167-168. *2VR*, pp. 253-256.）
171）*B4*, p. 32. Cf. *B4*, p. 10.
172）*B4*, p. 117.
173）*B4*, p. 11. pp. 18-19. pp. 57-60. p. 67. pp. 76-79. pp. 101-103.

としてキリストやその使徒が信ずることを要求した教え」[174] はあるけれども、そこでは、福音書や使徒行伝においてほど、それ以外の教えと明確に区切はできないから、書簡はそれを見分けるのに一番適切なところではない、しかし、書簡に書かれてあることは、キリスト者がそれを知るにつれて信ずべきことである〔*R*, pp. 152-156. *2VR*, pp. 249-250. pp. 288-289.〕[175]、と考えている。キリストや使徒の教えたことのすべてが「人間をキリスト者にするのに明確に信じられることが絶対に必要なこと」ではない。キリストがそういうものとして要求されたことだけがそうである。書簡のどこにも、そこに書かれている教えがそのような救いに絶対に必要な教えであるということは書かれていない[176]。

また、聖霊は使徒に、キリストが作ったのとは別の新しい誓約条件を作り、新しい誓約を立てる力を与えることはなかった。従って、救いに絶対に必要なことは、福音書の中に十分に、明確に含まれている[177]。

ボウルドは更に、「イエスは救い主である」と適切に信ずることが人間をキリスト者にするということの理由として、次の五点を挙げている。1．イエスや使徒は、この信仰だけに基づいて、人を弟子即ちキリスト者にした。2．イエスや使徒は、この信仰に対して、これ以外のことの信仰を加えることなく、救いを約束された。3．これ以外のことの信仰に対して救いを約束されていない。4．キリストや使徒のこれ以外の教えは、この教えを信じてキリストを自分の主として受け容れることによってのみ、正しく信じられる、即ち、救いに導く。5．「イエスはキリストである」ということの適切な信仰だけが人間をキリストの真の弟子とする、即ち、その人間がキリストの教えたこれ以外の教えを信じ、行なうようにする。従って、これ以外のことのそのような信仰、行ないは、イエスは救い主であると信じ、イエスを自分の主としていることの証拠、証明である[178]。

以上の考えを基にして、ボウルドは、『キリスト教の合理性批判』の著者の主張を批判している。その主要な論点は、次の通りである。

『キリスト教の合理性批判』の著者が言うように、この信仰の根拠、理由に関わる教えが救いに必要である〔*AR*, p. 9.〕とするならば、「限りない議論と混乱」が生ずるであろう。「イエスは救い主である」ということの意味は、これが提示された当時の人々にはよくわかっていた。それは、イエスを自分の主、王として受け容れ、イエスが教えたことを

174) *B4*, p. 63.
175) *B4*, p. 63. pp. 70-71. p. 83.
176) *B4*, pp. 65-66. p. 76.
177) *B4*, p. 69.
178) *B4*, pp. 32-36.

信じ、行なわせる信仰であった[179]。

『キリスト教の合理性批判』の著者の「信仰の一般的根拠に基づいて信ずべき真理」と「救いに関わる高次の真理」との区別〔*AR*, p. 11.〕は、根拠がない。どちらも神の啓示に基づいており、それを信ずる根拠は従って全く同じであり、違いはない。キリストが人間の救いをかちとられた仕方についての教えを信ずることは、人間が救いを得ることと直接の関係はない。それを信ずることは、救いを得るのに絶対に必要なことではなく、自分の主であるイエスに従い、イエスが啓示されたと知る時には信ずべきことである[180]。

『キリスト教の合理性批判』の著者は、聖書の中には「人間の救いに関係のないところ」がある〔*AR*, p. 18.〕と言う。しかし、それらのことも救いに無関係ではない。キリストが教えたと知っていることを信ずるかどうかは、どちらでもよいことではない。それを信ずることは、上述の通り、「イエスは救い主である」と信じていることの証拠、証明である[181]。

「キリスト者としてのわれわれの信仰の唯一の根拠は、神の超自然の啓示である」。「その教えの本性Nature」〔*AR*, p. 17.〕ではない[182]。この根拠が「教えの本性」であるとすれば、それは結局個々の人間の自然理性の判断に委ねられることになる[183]。

Ⅱ．キリストがこの世に来られた理由についての考察

「アダムの堕落によって至福と不死が失われたということには、両者は共に同意している。」ロックは、不死はキリストによってすべての人間に再び与えられているけれども、永遠の至福はそうではない、と考えている。そこで、永遠の至福を得るために絶対に必要なものは何かが『キリスト教の合理性』の大部分の主題である[184]。

『キリスト教の合理性批判』の著者は、ロックが不死の中に至福を含めていないことに不満がある、と私には思われる。不死がキリストによってすべての人間に再び与えられていることは、真実である。『キリスト教の合理性批判』の著者は、キリストがこの世に来られた理由・目的は、すべての人間の罪のあがない、贖罪のためである〔*AR*, p. 57.〕と言う。――しかし、贖罪は、キリストがこの世に来られた究極の目的ではない。キリストの苦しみと死、復活は、「キリストは死んだ人、生きている人両方の主である」（ロマ書

179）*B4*, pp. 43-46.
180）*B4*, pp. 48-51. pp. 61-62. pp. 68-69.
181）*B4*, pp. 59-60. p. 82.
182）*B4*, p. 57.
183）*B4*, p. 57. pp. 62-64.
184）*B4*, p. 86.

14：9.）という目的に至る道、そのための手段である。キリストは不死を人類のために無条件で贖われた。しかし、「人間に対する赦しと至福を無条件ではなく、特定の条件の下に、即ち、人々が真の神を信じ、その神から遣わされた者を信じて、その者を真実心から自分の主、王とするという条件の下で、贖われた。従って、キリストがこの世に来られた本当の目的は、自分の王国を得て王となり、自分の誠実な臣民となる人々に赦しと永遠の至福を授け、与える権利を得ることであった。」[185)]

『キリスト教の合理性批判』の著者は、「キリストは、われわれが受けるべきであったのと同じ罰を受けたということではなくて、彼の位格の高貴さの故に、彼の苦しみはこの世界のすべての罪人の永遠の罰と同等のものとなったということである。」〔*AR*, p. 60.〕と言う。――キリストは、罪人が破った法の罰を罪人に代って受けられたのではない。何故なら、法は、罪を犯した者以外の者がその罪の罰を受けるべきであるとは言っていないからである。また、「同等の苦しみ」を受けられたのでもない。同等の苦しみは罪を犯した者の罰の代りとなるとは、法には書かれていないからである。「位格の高貴さの故に同等の苦しみとされた」のであれば、「苦しみの程度」は贖いにとって問題ではないから、一滴の血ですべての罪人を救うに十分であった、という根拠のない危険な考えを生み出すことになる。「私の考えでは、キリストの贖罪は、この地上での仲立ちとしてのキリストがその復活に先立ってなすべきであると〔父なる神によって〕定められていた法を完全に成就されたことにあった。」[186)]

Ⅲ．キリストについて何を信ずるべきかについての考察

ここでのボウルドの主張の基本は，Ⅰでのそれと同じである。彼がそれに付け加えている主要な論点は、次の通りである。

救いに必要な信仰は「イエスは救い主である」と信ずることだけであるという考え、また、その証明の仕方は、ロックとホッブズHobsとでは同じである〔*AR*, pp. 64-65.〕。――それはその通りであるし、ホッブズが「イエスは救い主であると信ずることが、真の生ける神を信じている人間をキリスト者にするのに絶対に必要としてイエスやその使徒が要求していたことのすべてである」と主張していたとすれば、「彼は非常に大きな重要な真理を主張していた。」[187)] しかし、ホッブズの考えはロックの考えとは非常に違っている。1．

185）*B4*, pp. 86-88.
186）*B4*, p. 89.
187）*B4*, p. 20.

ホッブズは、キリスト者は「イエスはキリストである」ということ以外のことを信ずる必要はないと考えていると思われる。しかし、ロックは、そうではなくて、キリスト者はイエス・キリストが教えたと知るに至る多くの箇条を信ずることが必要である、と考えている。2．ホッブズは、「社会の良心」を主張し、「人々が自分の持っている、宗教問題で判断する権利を、他の者に譲り渡すこと」に賛成している。そのような考えの人は彼以外にも多くいるけれども、ホッブズの場合は、「この権利を市民社会の為政者に譲り渡す」ことに賛成している点が独自である。――これらの点でホッブズの考えは、『キリスト教の合理性』での考えとは（キリストや使徒の考えとも）正反対の考えである[188]。

『キリスト教の合理性批判』の著者は、神の子と救い主、キリストは聖書では常に同じ意味か、と問うている〔*AR*, p. 66.〕。――聖書で、人間をキリスト者にするのに信ずる必要があることを述べているところでは、これらの言葉は同じ意味で使われていることは、ロックが『キリスト教の合理性』で（『第二弁護』でも）明確、十分に証明している。私は、「神の子は、聖書の非常に多くの個所で救い主が神であることを意味している表現であることを認める。」[189] しかし、これは『キリスト教の合理性』の探究の主題ではない。『キリスト教の合理性』の主題は、人間をキリスト者にするのに明確に信ずることが絶対に必要とキリストや使徒が教えたことを明らかにすることであり、この信仰の結果、その人はキリストの教えを見出して、救い主は神であるということを含むその他の教えを信ずるに至るのである[190]。「父、子、聖霊」についての教え、「三位一体の教え」も、この後者の教えの一つである[191]。「イエスはキリストである」ことが真実であると信じさせるに必要な証明、証拠も『キリスト教の合理性』での問題ではない。これは場合によりさまざまであって、一つに決めることはできない[192]。

キリストがこの世に居られた時に人間をキリスト者にするのに十分であったことは、キリスト昇天後もそうである、とは言えない〔*AR*, p. 73.〕。――使徒行伝では、正反対のことが書かれている。使徒は、イエスが人々に差し出したのと同じことの信仰によって、人々をキリスト者にした。キリスト昇天以前にキリスト者にするのに十分であったことは、昇天後も同じく十分であるはずである[193]。

「イエスは救い主である」と信ずるということは、そのことについて聖書に説明されて

188) *B4*, pp. 90-94.
189) *B4*, p. 95.
190) *B4*, pp. 94-97.
191) *B4*, p. 17. pp. 108-109. p. 115.
192) *B4*, pp. 107-108.
193) *B4*, pp. 97-103.

いる十分な意味を含むものでなければならない〔*AR*, p. 77.〕。――聖書には、このような主張の根拠はない。使徒は、「救い主」という言葉を、当時のユダヤ人の間でよく知られていた意味で使っていたのであって、それに新しい意味を付け加えたということはない。使徒はイエスに関する教えを徐々に教えられたということは、事実である。これらの教えは、聖書のいろいろの個所に書かれている。そこで、これらを寄せ集めた、救い主についての十分な説明が今ではある、と言われる。しかし、誰がそれを寄せ集めるのか。誰かがそうして寄せ集めた教えは、それの完全なリストだと言えるのか[194]。

福音書と使徒行伝は、救い主に関して「イエスは救い主である」ということ以上のことを信ずることを要求している〔*AR*, p. 78.〕。――ロックは、福音書と使徒行伝に述べられている救い主に関わる教えを示そうとしたのではない。「人間をキリスト者にするのに明確に信じられることが絶対に必要としてキリストや使徒が要求したこと」[195] を明らかにしようとしたのである。従って、これは『キリスト教の合理性』への反論にはならない。聖書にキリストについて書かれてあることのすべてを明確に信じなければキリスト者ではないとすれば（そのようなことは、聖書には書かれていない）、そのような人間は（どれだけ）いるだろうか[196]。

神の啓示が（人間の理性が理解できるかどうかではなくて）、救いに必要な信仰を決める。『キリスト教の合理性』の著者もそう考えて〔*R*, p. 155.〕、聖書を探り、救いに必要な信仰箇条を見出した。『キリスト教の合理性』の著者が救いに絶対に必要とした「明白な、わかりやすい命題」だけを神が救いに絶対に必要とされたのは、「神の人間に対するいたわり、慈愛の抜きん出た証拠である」[197]。

こうして『キリスト教の合理性批判の考察』*B4*は、『キリスト教の合理性及びその弁護の数節』*B2*よりも書き方は丁寧であるけれども、基本的な論点は『数節』と同じであり、それを別の著作『キリスト教の合理性批判』に適用したものである。ここでは、「贖罪」、「三位一体」、「キリストは神であること」は、『数節』でと同じく、「人間をキリスト者にするのに必要な信仰箇条」ではなくて、「キリスト者がキリストの教えであると知って、信ずべきこと」に含められており、『キリスト教の合理性』の主題ではないとされている。しかし、三位一体について、『数節』とは違って、ボウルドは三位一体を認める自分の考

194) *B4*, pp. 103-106. p. 110.
195) *B4*, p. 109.
196) *B4*, pp. 109-123.
197) *B4*, pp. 117-118.

えとロックの考えとの間の違いに気がついていると読むことができる個所〔*B4*, p. 17.〕がある。

なお、「贖罪は、キリストがこの世に来られた究極の目的ではない」あるいは「神の子は、救い主と同じ意味であるけれども、また、救い主が神であることを意味している、しかし、後者は、『キリスト教の合理性』の主題ではないから、そこには書かれていない」というボウルドの主張は、「目的」や「神の子」という言葉をロックが使っているのとは別の意味で使っており、ロック弁護論としては説得力がない。また、「イエスは救い主である」ことの意味は当時の人々にはよくわかっていた、とボウルドは言っているけれども、『キリスト教の合理性批判の考察』でのボウルドの説明によっても、この文の意味は明瞭ではない。

6．サミュエル・ボウルド『人間知性論に対する反論の考察』1699.

ロック『人間知性論』*HU*に対する幾つかの批判に反論したSamuel Bold, *Some Considerations on the Principal Objections and Arguments which have been publish'd against Mr. Lock's Essay of Humane Understanding*（『ロック氏の人間知性論に反対して出版された主要な反論、議論に関する幾つかの考察』）, London, A. and J. Churchill, 1699.（*B 5*と略記する）の要旨は、次の通りである。

『人間知性論』に対する何人かの批判において間違いとされた主要な個所は二つ、Ⅰ.「知識の確実性は、命題に表現されている、観念の一致あるいは不一致を知覚することである。」（*HU*, Ⅳ, Ⅵ, 3.）Ⅱ.「われわれは、物質という観念、考えるという観念を持っている。しかし、ただ物質であるだけのものが考えるか考えないかを知ることは絶対にできないであろう。われわれは、自分の観念を考察することによっては、啓示がなければ、全能者が、適切な内部構造を持つfitly disposedある物質組織に、知覚し考える力を与えなかったかどうか、あるいは、そうでなければ、適切な内部構造を持つ物質に考える非物質の実体を結びつけ、固定しなかったかどうかを見出すことはできないからである。」（*HU*, Ⅳ, Ⅲ, 6.）である[198]。

Ⅰに対する批判には、二つある。1．この「観念の方法」は真でない。従って、「確実

198）*B5*, pp. 2-3.

性、知識に至る方法」ではない。それに対して、「公準からの推論」が「知識、確実性に至る方法」である〔*A2L*, pp. 107-109. p. 146.〕と言われる。2．これは、「キリスト教の信仰箇条と矛盾し、それにとって危険な結果をもたらす。」〔*A2L*, pp. 64-66.〕[199]

1について。

「命題の真理〔*HU*原文は、真理の確実性〕とは、言葉が表わしている観念の一致、不一致を、現実にある通りに正確に表現するように、言葉を命題の中で並べ置くことである。これをロック氏は真理の確実性と呼んでいる。〔*HU*, Ⅳ, Ⅵ, 3.〕」[200]（ボウルドは、ここでは、従ってまたⅠに関わる以下の議論では、「現実にある通りas really it is」を「命題にある通りas the Proposition doth express」[201]と理解して、「真理の確実性」を上述Ⅰで引用された「知識の確実性」と全く同じことと考えている[202]。）「自明の原理、命題からの推論、理性に適う演繹」[203]は、観念の比較によらなければできない。従って、中間観念相互の間の自明の一致、不一致を知覚する観念比較の方法が確実性に至る唯一の方法である[204]。

2について。

神の啓示の幾つかは、言葉が表わしている観念の比較によっては、その観念の間の一致、不一致を知覚できない、従って、ロックのこの考えでは、これらの命題の真であることを知ることはできないことになる、これはキリスト教信仰箇条と矛盾し、危険である、と言われる。――しかし、命題の真であることは、その命題がどのような仕方で得られるかには関わりなく、「その命題の中の言葉によって表わされている観念の一致、不一致がその命題の表現している通りであることの知覚」[205]にあることに変りはない[206]。

①キリスト教の信仰箇条は正しいし、ロックの命題は正しい。この二つは両立する。神の啓示の中には、観念の一致の知覚によっては知ることのできないものがある。われわれはそれを知るのではなくて、神の啓示の故に信ずるのである。「信仰は理性に適う行ないである」[207]。しかし、理性に適う行ないのすべてが、確実性、知識ではない。十分な証拠に基づいて同意することは、理性に適うことであり、神の証言に基づいて同意する場合はそうである[208]。②ロックのこの考えは、知識に関わるのであって、「信仰箇条とは全く関

199) *B5*, p. 4.
200) *B5*, p. 4.
201) *B5*, p. 5.
202) Cf. *B5*, pp. 4-6. p. 9.
203) *B5*, p. 8.
204) *B5*, pp. 8-10.
205) *B5*, p. 11.
206) *B5*, pp. 10-11.
207) *B5*, p. 13.
208) *B5*, pp. 12-14.

係がない」[209]。ロックの上述の命題から、「真であると知るに至ることのできる以外の命題を真であると信ずるべきではない」という命題を導き出すことはできない。従って、ロックの考えはキリスト教の信仰箇条にとって危険である、とは言えない[210]。

従って、ロックのⅠの命題に対する主要な批難は全く根拠がない。確実性に至る方法は、常に観念の比較によるのであり、それ以外の方法によるのではない。過去の人々は、そのことを十分に自覚しておらず、ロックがはじめて知識、確実性とは何かを明確にしたのである[211]。

Ⅱに対する批判には、二つある。1.「これは魂の不死と相容れない、あるいは、少なくともそれの明白さを大いに弱める」、ロックのⅡの主張が真であれば、「魂は物質でない」とは論証できなくなる。魂が物質であれば、それは生命が終れば、消え失せることになる。このようにして「神は本性上ありえないものを与えられたということにだけ、不死が基づいているならば、不死の明白さは大いに弱まる。」〔*AL*, p. 55.〕と言われる。2.「物質の本性Natureからして、これは誤りであると証明できる。」[212]

1について。

①「魂の不死は、魂は非物質であるということを理性の仕方で論証証明によってわれわれが知るあるいは知覚するということに基づいているのではない。」〔Cf. *AL*, pp. 54-55.〕[213]

〔②〕「ロック氏は、魂は物質である、とは言っていない。それが非物質であるということは最高度にありそうであるということを認めている。しかし、物質と考えるという観念を比較することによっては、魂は非物質の実体であるということの論証による確実性、即ち、知識に至ることはできない〔これは、われわれの理性の及びえないことである〕、但し、この方法で魂は霊の実体であるということを知ることはできるであろう、ということを認めている。」[214] このことを支持するロックの議論、即ち、神はそうしようと思えば、ある実体に考える力を付け加えることができる、などという議論は根拠がないあるいは弱いということの証明は、誰によってもされていない[215]。

③1の議論にある「生命あるものは、物質の実体に他ならない」〔Cf. *AL*, p. 55. p. 57.〕ということは言えない。その実体の知覚できる部分は滅びても、生命のすみかと神が定め

209) *B5*, p. 16.
210) *B5*, pp. 16-17.
211) *B5*, pp. 17-18.
212) *B5*, p. 19.
213) *B5*, p. 19.
214) *B5*, pp. 19-20. Cf. *B5*, p. 22.
215) *B5*, pp. 20-21.

られた知覚できない部分は生きているからである。「魂は創造された非物質の実体であると論証により証明できると考える者は、魂は創造された非物質の実体以外の何物でもないと断言することには注意しなければならない。……何故なら、魂が創造された非物質の実体以外の何物でもないとすれば、それは霊のあるいは考える実体ではないからである。何故なら、考える力は、物質の実体であれ、創造された非物質の実体であれ、神がわれわれの実体の観念に付け加える力であり、いずれの実体が考える力を持つとしても、それは、ロック氏が極めて思慮深く、敬虔に述べているように、ただ創造主の御心と恵みによる以外にないからである。」[216)]

④「神は本性上ありえないものを与えられたということにだけ、不死が基づいているならば、不死の明白さは大いに弱まる。」〔*AL*, p. 55.〕――この意味は分かりにくい。創造された実体は、神が与える以上のものを持つことはできない。しかし、神は物質の実体に考える力を付け加えることができるとすれば、考える物質の実体が本性上不死ではありえない、と人間が確実に知ることはできない。それが不死か否かは、それの本性の考察によるのではなくて、それに関する神の御心の理解により決められるべきことである。魂は非物質であるという論証証明は、これまでにされてはいない。従って、「魂が物質の実体であれば、それはいつか必ず死ぬ」〔Cf. *AL*, p. 55. p. 57.〕ということにはならない。「物質の実体はすべて、いつか必ず死ぬ」という考えは、キリスト教信仰の次の二つの箇条を否定することになる。ⅰ.「罪により、人間は必ず死ぬものとなった。」人間の一部は、創造された時、物質であった。従って、物質の実体はいつか必ず死ぬのであれば、人間は罪を犯さなくても死んでいたはずである。ⅱ.「復活の後、人間は不死となる。」復活の後、人間の一部は物質である[217)]。

2について。

①一般論。実体は、物質、非物質に分けることができる。神はこれらの実体に、その御心のままに、さまざまな力を与え、付け加えることができる。そのような力を実体に付け加えられたかどうかを、人間は、理性のみによっては、神の啓示によるのでなければ、知ることはできない。考える力を付け加えられた実体は、それが物質であれ、非物質であれ、(物質は物質であり、非物質は非物質であるけれども）霊Spiritである。従って、考える実体は非物質である、ということにはならない[218)]。

---

216) *B5*, pp. 21-22.
217) *B5*, pp. 22-25.
218) *B5*, pp. 26-28. pp. 49-50.

②ロック『人間知性論』のこの個所への反対論を集約していると言えるRobert Jenkin, *The Reasonableness and Certainty of the Christian Religion*, 2 vols., 1696-97. の反対論を検討する[219]。

i.「神が物質の本性を変えることがなく、あるいは、物質に別の本性を持つ実体を結びつけることがないならば、神はどのようにして物質に考える力を付け加えられるのかは、わからない」[220] ——ⓘわれわれには分からない仕方で神が行なわれることは多くある。ⓘⓘ「ここでは、神はどのようにしてここに指示されているどちらかの仕方で物質に考える力を付け加えられるのかは〔人間に〕理解できる〔従って〕……どちらの仕方にせよ神は物質に考える力を付け加えられなかったということは論証証明できる、と想定されている。」[221] しかし、この二つの仕方のどちらによるにせよ「神がある物質組織にどのようにして非物質の考える力を結びつけられるのかは理解できない。」しかし、それ故に「神はそうすることができない、あるいは、そうされなかった」ということにはならない。「ロック氏の言う通り、考える力は非物質の実体に付け加えられているということ、考える力がある物質組織は、考える力が付け加えられている非物質の実体がそれに結びつけられているということは、最高度にありそうなことであるけれども」、確実なことではない[222]。

ii.「しかし問題は、考える力は、物質の力やさまざまな様相Modificationsから作り出すことができるか、ということである。」[223] ——非常に不明瞭な問題の立て方である。なぜなら、物質の中の一つの力がその中の他の力から作り出されるということはありえないからである。物質に考える力が付け加えられるのは、神の御心と恵みによる。ロックもここで、物質の力やさまざまな様相から何が作り出されるかについては論じておらず、神は物質に何を付け加えることができるかについて論じている。神がどのようにしてそれを付け加えられるかは、われわれには理解できない[224]。

iii.「音の様相がどのようにして見ることを作り出すかがわれわれに分からないのと同じように、物質の様相がどのようにして考えることを作り出すことができるかは、分からない。」[225] ——このことは、物質に考える力が付け加えられることはありえない、ということの論証にはなっていない。但し、ロックが「適切な内部構造を持つ物質組織」と言っ

219) *B5*, p. 28.
220) *B5*, p. 29.
221) *B5*, p. 30.
222) *B5*, pp. 33-34. Cf. *B5*, pp. 38-39.
223) *B5*, p. 34. Cf. *B5*, p. 37.
224) *B5*, pp. 34-37.
225) *B5*, pp. 37-38.

ているように、「物質の特定の様相は、物質組織を考える力を受けるにふさわしいものに整え、するのに不可欠、必要であろう。」[226)]

iv.「物質の様相はすべて、〔物質が考える力を持つということに関しては〕同じである。」[227)] ——同じではない。「考える岩」や「考える柱」は、「考える人間」と同じように理解できるということはないからである[228)]。

v.「物質は、その様相を変えることによって考えるようにすることができるのであれば、同じようにして物質でないものにすることができる。」[229)] ——これは全く理解できない、不可能なこと。物質はどれだけその様相を変えても、物質である。「しかし、物質は、特定の様相の下では、考える力が付け加えられる時には考える、ということは全く矛盾がなく、……理解できる。」[230)]

vi.「物質が考えることがありうるのであれば、非物質の実体が広がりを持ち、分割可能になることがありうることになる。言い換えれば、神は、広がりと分割可能という力を非物質の実体に付け加えることができることになる。」[231)] ——ⓘ非物質の実体は、神の御心により、物存在性Solidityと（あるいは）考えThoughtを持つことができる。しかし、非物質の実体はすべて、考えるという様相を付け加えられている、ということを証明することはできない。従って、考えるということは非物質の実体と切り離せないものである、ということを証明することはできない[232)]。ⓘⓘロック批判者は、非物質と考える力とは同じ観念を表わす、物存在性を持つ実体に考える力が付け加えられることはない、と考えている。しかし、物質の実体に考える力が付け加えられる時には、実体は依然として物質であり、その実体が考えることができるのは、物存在性によってではなく、その実体に付け加えられた考える力によってである。どれだけの種類の様相が実体の観念に付け加えられるかは、人間の理解を越えている。しかし、その実体は、付け加えられた様相（物存在性、動くことができる、考える、など）に応じて、それに対応する名で呼ばれることになる。この時に、考える力が付け加えられても、物存在性がなくなるということはない[233)]。ⓘⓘⓘある物質には考える力がある。これは、物質の実体の様相変化によるのか、物質とは別の非物質の実体が物質に結びつけられたためか、二通りに考えることができる。ロックは、

226) *B5*, pp. 38-47.
227) *B5*, p. 47.
228) *B5*, p. 48.
229) *B5*, p. 48.
230) *B5*, p. 49.
231) *B5*, pp. 49-50.
232) *B5*, pp. 51-52. pp. 56-59.
233) *B5*, pp. 52-55. p. 56.

後者が最高度にありそうであるけれども、どちらであるという論証証明はできない、と考えている[234]。

多くの人々が反対してきた「論証による証明ができないことに関して、論証による確実性を主張すべきではないということ」[235] について。——これは大きな真理であり、こうして「われわれの理性をそれにふさわしいところに限り、信仰にその正当な場を与えるということ」[236] は、真理と信仰に大いに役に立つ。「キリスト者や特に聖職者、牧師が……神が人間の手の完全に届かないところに置かれたことを知っていると誇示すること」ほど、懐疑論者を有利にすることはないのではないかと思う[237]。

Ⅰに関して。ボウルドは、「真理の確実性」を「知識の確実性」と混同している。ロックもこの二つを混同しているところがある。しかし、ボウルドはここでは、命題の確実性を得る方法を一貫して観念の比較に限っており、現実と命題との一致については、ロックとは違って、何も考えていない[238]。また、ボウルドは、キリスト教の信仰箇条は確実な知識ではないけれども、正しい真理である、この信仰箇条は、「命題が真であることの確実性は、命題の中の観念の一致、不一致の知覚にある」というロックの考えと両立する、と言っている。しかし、確実ではない命題が何故正しいのかはわからないし、相容れないところがある二つのことが共に正しく、真理であるのであれば、正しいとか真理の意味が何かは不明確である。

Ⅱに関して。ボウルドは、考える力を付け加えられた実体は、それが物質であれ、非物質であれ、霊である[239]、と言う。しかし，1．この考えに従えば、物質の実体が、物質とは区別されるものである（とボウルドも認めている）霊と呼ばれることになる。2．ここで、考える力を付け加えられる前の非物質の実体（この観念はロックにはない）としてボウルドが何を考えているのかは、不明確である。また、ボウルドは、このことに関連して、物質の本性の探究と神の御心の理解とを切り離して、物質、非物質の実体に考える力が付け加えられているということを理性のみによっては、神の啓示によるのでなければ、知ることができない[240]、と書いている。しかし、これは極めて疑わしい。更に、このことと

234）*B5*, pp. 56-57. Cf. *B5*, pp. 31-33.
235）*B5*, p. 59.
236）*B5*, pp. 59-60.
237）*B5*, p. 60.
238）妹尾剛光『コミュニケーションの主体の思想構造——ホッブズ・ロック・スミス——』（改訂版）北樹出版，1996, 221-223頁参照。『エドワーズに対する返答』*B3*では，ボウルドは，命題が理性に適っているということは，命題の中で主語と述語とが，それらが意味しているものの間の関係を真実に表わしている，ということである（*B3*, The Preface, p. xi. Cf. *B3*, The Preface, p. xiii.）、と書いている。
239）*B5*, p. 26.
240）*B5*, p. 26.

関連して、ボウルドは、神は、考える力を受けるにふさわしい「適切な内部構造を持つ物質組織」に考える力を与えられる[241]、と言っている。この「適切な」という言葉の意味は不明確である。これは、「人間が適切と考えることができる」という意味を含まないのか。もしもそのことを含むとすれば、ボウルドが主張している神の全能、即ち、「神の御心と恵みによる」[242] には限定がつけられていることになる。また、人間の理性による探究も可能であることになる。

こうしてボウルドの『人間知性論に対する反論の考察』*B5*での議論には、考察不十分のところがかなりある。

ロックは、ボウルド宛書簡（1699年5月16日付）で、『人間知性論に対する反論の考察』*B5*について、「あなたの推論は、非常に力強く、正しいし、あなたの私に対する友情は非常に明らかなので、あなたのペンから出てくるものはどれもみな、どんな種類のものであっても、私には大歓迎であるにちがいありません。」[243] と書いている。

―― 2001.11.15受稿 ――

241) *B5*, pp. 46-48.
242) *B5*, p. 22. p. 37. Cf. *B5*, p. 26. p. 51.
243) *The Correspondence of John Locke*, Vol.6, Letter No.2590.